
キリシア大陸物語 ～ルブレシア戦記～

ホーネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリシア大陸物語 ヱルブレシア戦記

【Nコード】

N8374W

【作者名】

ホーネット

【あらすじ】

キリシア教徒が暮らす、キリシア大陸。その大陸を舞台に繰り広げられる英雄譚——異教の王子、レオ。大国の王女にして小国の王位継承者、イーダ。不老の聖女、ブリュンヒルト。帝国とハルガリアの二大国が争うキリシア大陸東部の小国ルブレシアにおいて、今、歴史の一ページが綴られようとしていた……。

世界観

>登場人物<

○レオ

リヴォニア大公国の黒髪黒眼の若き王子。ルブレシアのルブリン王立大学に留学中。

○イーダ

ハルガリアの王女にしてルブレシアの第一王位継承者、”月明かりのような”銀と云われる髪を持つ美少女。

○ブリュンヒルト

キリシア教会の数百年を生きる金髪碧眼の聖女。

○ユルギス

レオの腹心にして切れ者。

○エルネア

イーダの侍女。

○アメルハウザー

聖剣騎士団の団長。2mを超える背丈を持つ巨躯の男。リヴォニアとルブレシアと敵対している。

○ジグスメント3世

ルブレシアの勇敢なる王。現在、その身は帝国にある。

○ヤノーシエ

梟雄と称されるハルガリア王。イーダの父。帝国との戦争のため

遠征中。

＞世界設定＜

＞i31528—3996＜

キリシア大陸

キリシア教徒が大部分を占める大陸。リヴォニア大公国の東にある地峡によって中央大陸とつながっている。

ルブレシア王国

キリシア大陸東部の人口90万の小国。

国土の大部分は未開発で隣国リヴォニアとの国境付近は森林が広がる。

伝統的に異教徒との交流がなくては国が立ち行かなかった為に異教徒に寛容。

現在、王はハルガリアとの同盟の為、帝国に遠征中。

リヴォニア大公国

ルブレシアの東の隣国。キリシア大陸にあって珍しくキリシア教を信仰していない国家。

人口300万人。リヴォニアの西部はルブレシアから続く森林地帯が広がり、東部には草原地帯が広がる。

大公国とは云え、実際は諸部族の連合国家である。

ハルガリア王国

キリシア大陸東部の二強の一角。600万の人口。イーダの父が現

在のハルガリア王。

現王の下で急速に勢力を拡大、現在は帝国の帝位継承権を要求し、帝国と交戦中。

騎馬民族が定住して誕生した国家ゆえに、強力な騎兵を擁している。

帝国

キリシア大陸東部の二強の一角。人口1100万。

人口も多く、産業も良く発達して豊かな国家。ハルガリアとルブレシアの西隣の国。

しかし、皇帝の支配の及ぶ領域は限られ、皇帝派と諸侯連合が争う内乱期を迎えている。

現皇帝は賢帝と呼ばれながらも病弱で、そこをハルガリアに潰け込まれ戦争になる。

ハルガリアの同盟国であるルブレシアとも交戦中。

草原諸国

リヴォニアの東方、地峡の向こう側に広がる遊牧民族国家群。リヴォニア人の祖先が暮らしていた地域でもある。現在、十二部族からなる十二の国家がある。

小国家都市群

ハルガリアの南にある小国家地帯。形式上の主権は帝国の皇帝があるが、小国家都市群は各々都市が同盟を結び、大きく5つの勢力を形成している。

>世界情勢<

世界情勢

キリシア大陸東部は帝国とハルガリアの二大国の戦争に突入している。相対的な国力ではハルガリアが劣るものの、反皇帝派の貴族を味方につけることと、ルブレシアの勇敢な王との同盟によりハルガリアが有利に戦争を進めている。

一方で、キリシア大陸にありながら唯一の非キリシア教国家であるリヴォニアは東方の騎馬民族や改宗を迫って侵略してくる聖剣騎士団との戦いに明け暮れており、これらの共通の敵と戦うためにルブレシアとは友好関係にある。

キリシア大陸西部では遠距離航海が静かなブーム。数百年前の海賊伝説によるとはるか西には別の大陸があるらしい。頑張れ。

序章 審問 ？

序章 審問・前編

——キリシア教徒が大部分を占める、キリシア大陸の東方に、歪な縦長の菱形をした国土を持つ国家がある。

その未発達具合から、しばしば蛮国と揶揄されることもあるルブレシア王国である。

その国土の大部分は平地であるが、ほとんどが未開拓で、広葉樹の森が広がり、無数の湖が点在している。人口は、百万に届くかどうかであろう。

その貧しい国土の、それでも比較的豊かな南部にある、人口二万人の王都ルブリンには国内唯一の大学があった。

王立大学と云う、特に芸の無い名前のこの大学は。法学部、神学部、医学部、農学部、の四つと、四百人の学生を擁していた。

普段は帝国や隣国のハルガニアの大学に比べれば余りに”貧相で活気に欠けている”大学であるにもかかわらずこの日は異常な活気に満ちていた。

☆ ☆ ☆

法学部に所属する、一人の青年が急ぎ足で廊下を歩いていた。青

年の名はレオ・クビツァと云い、キリシアでは珍しい黒髪を持っており、その背は周りの学生よりも少々高めであった。

黒髪とルブレシア人よりも少々高い背は、ルブレシア人の隣人、リヴォニア人の特徴であった。典型的なリヴォニア人の特徴を押さえた外見に、好青年めいた、明るい輝きを放つこの青年はリヴォニア大公国の王子であった。現在、大学のないリヴォニアからの留学中であつた。

「おい、急げ」

騒々しさの中、少し急かすようにレオが口を聞いた相手は、たいそう美しい少女であつた。

腰まで伸びたシルバールンドの髪は細やかで艶やかで、高い鼻と薄くも厚くも無い頬は絶妙なバランスを顔の造形にもたらしつた。

そしてさらに、白い頬にのった、りんごのような赤みが、そんな美しさにかわいらしさを加えている。そして、その瞳は、どこまでも静寂が漂うような、濃い空色であつた。

「待ってよ、レオ。わたし達には特別に席が用意されているから大丈夫じゃないかしら？」

少女の、少しだけ薄く、それ故に、ほんの少しだけ化粧で赤みを足した唇が、そう言葉を紡いだ。それは、ひどく懐かしさと暖かさを感じさせる声であつた。もし、声に温度があつたのであれば、それは恐らく、春風のような温度であつただろう。

少女の名前はイーダと云い、神学部の学生であった。ルブレシアの隣国、ハルガニアの王女であり、またハルガニアの王位継承権をもつ少女である。

もつとも、それはまだ若いルブレシア王に子が生まれなかった場合に限られていた。それは複雑な婚姻関係と外交によるものであり、イーダがハルガニアの王位継承権を得る為に、ハルガニア王はイーダのハルガニア王位継承権を破棄させていた。

「そうは云ってもな。聖女……さまが先に来てたら無礼に当たるんじゃないのか？」

その問いにイーダが答えようとした時、他の学生の声が二人の耳に届いた。

「聖女さまはもういらしたのか？」

「まだ審問は始まってないらしい」

この王立大学を包む活気の原因、それはキリシア教の聖女ブリュンヒルトが訪れるからであった。

曰く、ルブレシアの対異教徒政策について、神の教えに背いているのではないか、と云うのである。そのことについて審問するため、聖女ブリュンヒルトがやってくるのであった。

レオは、キリシア大陸で珍しい、土着の自然宗教を信仰する、リヴォニアの王子である。自然の恵みを崇めるレオからすれば、例えば魔術が扱え、数百年と生きていようが人間を崇めるといえるのは理解しがたかった。

「だろ？ 急ごう。それにしても、俺、公開処刑されたりしないよ

な？」

レオが公開処刑と云ったのは、レオが異教徒の王子である為に、聖女らに激しく非難されるのではないか、という危惧であった。

だが、イーダはにこやかに笑って、それを否定した。

「聖女さまには以前お会いしたことがあるけれど、そんな方ではなかったわ」

「ならいいんだが……」

そんな会話をこなしつつ、二人はこれから審問が行われる大講堂へたどり着いた。

そして、そのケヤキでできた、分厚い扉をレオが押すと、その中には、廊下以上のざわめきがあった。そのざわめきの発生源である人間は、二千人近くはいるのではないかと思われた。

皆、これから始まる審問と聖女に大きな関心を寄せているのだった。

「こっちみたいよ、レオ」

特別に用意された席を見つけて、イーダが云った。

「ああ……」

だが、レオの方は、視線を別のところに固定したままで生返事をするだけであった。

「どうしたの？ レオ」

「向かいを見てみるよ」

レオがそう吐き捨てるような言葉通りに見ると、そこには異常な巨躯の男が居た。少々縮れた赤毛と、髭が特徴的であり、また、全体的に毛深い。

比較的長身のレオよりもさらに頭一つ分大きい巨体と、野生を思わせる毛と、そして何より、品と云うモノをほとんど感じさせない雰囲気から、どうしても他者に余り良い印象を与えない人物であった。

「アメルハウザー……」

イーダがその巨躯の男の名を呟くと、レオは語気を強めて云った。

「今、あいつを殺してしまえば、ルブレシアとリヴォニアの頭痛の種がなくなるぞ」

アメルハウザーは聖剣騎士団というキリシアの武装集団の団長であった。レオの祖国リヴォニアはキリシア教徒の国ではないので、聖剣騎士団の”聖戦”の対象となって久しかった。

そして、ルブレシアは同じキリシア教徒の王が統べる国であるにも関わらず、その異教徒への寛容政策からしばしば攻撃の対象とされてきたのである。

聖剣騎士団領自体の規模はは、人口三百万、国土もルブレシアの

三倍はあるリヴォニアはもとより、小国ルブレシアに劣る。

だが、聖戦という大儀によって莫大な財産の寄付や義勇兵の参加を得ているこの武装集団に、ルブレシアやリヴォニアは劣勢に立たされ始めていたのだった。

「聞こえるわよ」

そのような事情を、ハルガリアも王女でありながらルブレシアの王位継承者であるイーダも知っており、また、アメルハウザーに対して良い感情を持っていなかったが、それよりもこのような会話が周りに聞こえてしまうのではないか、という危惧が沸いたので、形の良い眉をひそめて注意した。

「大丈夫さ」

レオが飄々とそう答えたその時、一人の女性が姿を現した。大講堂の大衆のほぼ税インが待ち望んでいた聖女ブリュンヒルトである。

聖女ブリュンヒルトは美しい女性であった。肩まで伸ばしたきさらとしていた金髪。まだま若いイーダよりも、幾分女性らしい丸みを帯びた身体つき。そして、まだ二十ぐらいにしか見えない外見とは裏腹に聖女として何百年も生きたその“重さ”が吸い込まれるような輝きとして、翠の瞳に湛えられていた。

「あれがキリシアの聖女ブリュンヒルト……様か」

割とずぶとい神経の持ち主であるレオも、周囲をおもんばかって、異教の聖女に遅れながらも様を付けた。

「どう？ 神々しいでしょう？」

「そういうことは良くわからんが、取り敢えず凄くいい女とは思うな」

イーダの言葉にレオがそう返すと、イーダは呆れような、それでいて不満も入り混じった視線を投げかけて、そのまま沈黙した。

「……………」

「……………」

レオはその沈黙に対してどうするかを悩んでいたが、丁度その時、救いが差し伸べられた。

「これより審問を開始します」

それは、聖女ブリュンヒルトの声であった。

☆ ☆ ☆

ブリュンヒルトの澄みわたった声が大講堂に響き渡ると、先ほどまでのざわめきが嘘のようにひいていった。

異教徒であるレオでさえ、ブリュンヒルトの声に何かを感じざるを得なかった。

「まず、告発人、ルブリン司教ヴィジンスキー。告発内容をお願いします」

「はい」

ブリュンヒルトの声にそう答え、席を立った男は、白と青の聖職者の服を纏い、司教杖を持った党人だった。折れてしまうのではないかと細く、枯れたような腕に大きな宝石がいくつもついた司教杖を持っている姿はすさまじいおかしさを見る者に感じさせた。

レオなど、先ほどのブリュンヒルトの声が無ければ指をさして笑ったに違いなかった。

笑いを堪える聴衆の様子に気付きもしないで、ヴィジンスキーはしがれた声で、しかし見かけによらずはつきりとした口調で告発を始めた。

「以前からわたしはこの国の宗教政策に疑問を持っております。異教徒に同じ権利を与え、さらには法と俗世が神聖にして不可侵の信仰よりも重要だと断じているのです。例えば私がある貴族が異教徒と結婚したいと言ったとき、わたしはもちろん、これを拒否しました。しかし、この国の高等法院とルブレシア王は伝統と正義に拠るわたしの意見を見做し、これを承認してしまいました」

告発の途中から混じり始めていた野次は、告発が終わったと同時に最大に達した。その中には”売国奴”などという野次まであった。

ルブレシア人の多くは、異教徒と共存が可能だと信じているのであった。

「証人、聖剣騎士団長、アメルハウザー、証言をお願いいたします」

ブリュンヒルトは野次を押さえるかのように、語気を強めてそう云った。そうするとまたも大講堂は静寂に包まれた。

「はい」

立ち上がるのは、先ほどレオとイーダとの間で話題となった、聖剣騎士団の団長、アメルハウザーであった。アメルハウザーはその巨体から野太い声を出し、ヴィジンスキーと同様に、ルブレシア批判を行った。

「三年前、我が騎士団は異教徒のリヴォニアと戦争をしておりました。ところが、その時、ルブレシアが我が軍の間隙をぬって、我らの固有の領土であるフルワを陥落させてしまいました。異教徒と組んで、教皇聖下の剣である我らに抵抗するルブレシアの意図が、キリシアの秩序の破壊であることは明らかかと思われます」

そこまで云って、一度アメルハウザーは周囲を見回した。そして、自身に向けられている、ルブレシア人たちの敵意溢れる視線を黙殺しつつ、レオの方を指さした。

「そして……このような神聖なる場に異教の国の汚らしい王子を招いていることが何よりの証拠です」

「……………」

「お、押さえてレオ」

侮辱されたレオが拳を握り締め、激高しそうになったのを見て、イーダは必死に宥めた。するとレオも一度深呼吸をして、落ち着いてみせた。何より、アメルハウザーにしろ、ヴィジンスキーにしろ、

余りに狂信的でこのルブレシアでは異教徒にきつく当たることが、非難されることだと気付いてなく、彼らが自分で自分自身の首を絞めているのだ、と思うことにしたのだった。

「ルブレシア側、反論があればどうぞ」

「王都をあけられております、我が王に代わり、ルブレシア議会議長であるわたしがお答えいたします」

初老の白ひげの男……ルブレシア議長はブリュンヒルトと、その他ここにいる全ての者にそう断って、反論を始めた。

「まず、先ほど司教殿が挙げられた結婚の例ですが、異教徒に同じ権利を与えているのは彼らがキリシア教徒と同じように税を納めているからであり、何より同じ人間であるからであるからに……」

「異議あり」

議長の反論をさえぎったのは、アメルハウザーであった。議長は途中で発言が遮られ、不愉快そうにアメルハウザーを一瞥し、ブリュンヒルトに目で却下するように求めた。だが、ブリュンヒルトは礼儀の無いアメルハウザーに呆れたように首を振りながらも、発言する機会を与えた。

「どうぞ」

「異教徒は人間ではない！」

人の言葉を遮ってまで行った主張がこれである。ブリュンヒルトを始めとして、ルブレシア人のほとんども呆れて言葉もでなかった。

しかし、アメルハウザーやヴィジンスキーはまるで、議論を制したかのように誇らしげな顔をして見せている。レオはもはや失笑しが出なかった。

「ゴリラが人間様に向かって何か云ってるぞ」

そんなレオが隣のイーダにレオがそう小声で囁くと、イーダは思わず噴き出してしまいそうになった。確かに、アメルハウザーの巨体はゴリラを連想させるぐらいには毛深かった。

「議長、続けてください」

暗にアメルハウザーの言を黙殺してブリュンヒルトは云った。アメルハウザーはそれに対して不服そうな表情を見せ、再び口を開こうとしたが、その前に、議長が反論の続きを始めた。

「異教徒との結婚を認めたのは、結婚業務を行う教会に対する税である教会税を彼と、彼と結婚を望む異教徒が支払っていたからである。もし、異教徒に対して結婚業務を行わないというのであれば、ルブリン司教区は異教徒に対して教会税を課すことを辞めるべきである。さらにそこな聖剣騎士団の団長は、類稀な厚顔無恥な人物である。我々の手元にはフルワから取り立てていた税の台帳、八十年分が残っており、彼らが暴力によって同じキリシア教徒から領土を奪ったのは明白である。我々は機会が訪れたので、本来我がものである都市を取り戻すために聖剣騎士団と剣を交えただけである。決してリヴォニアと同盟したり、示し合わせたりの行動ではない！」

その論の最後に議長は怒りに任せ、机に思いつきり拳を叩きつけた。大きな音が、大講堂に響きわたった。

「税台帳を提出することは可能ですか」

興奮し、肩で息をし始めた議長に、静かにブリュンヒルトは云った。その、澄んだ、よく通る声を聞き、議長は幾分か冷静さを取り戻して答えた。

「はい、ここにございます」

議長が目で後ろに控えていた居た一人の男に命令すると、命令された男が議長に分厚書類を差し出した。

「こちらへ持ってきてください」

議長はブリュンヒルトの指示通りにその書類を提出した。そして、その書類をパラパラと捲った後に、控えていた老人に差し出した。

「紋章官、この書類のフルワ市長の印は本物ですか？」

「……少々お待ちを」

しばし書類をじっくりと見てから老人は静かに云った。

「本物ですな」

それを聞いてブリュンヒルトは議長の方を見て頷いた。

「わかりました。ルブレシア側の主張を容れ、ルブリン司教ヴィジンスキーと聖剣騎士団長アメルハウザーの告発を却下致します」

「聖女さま！ 反論の機会を！」

「黙りなさい！」

アメルハウザーの抗議を即座に却下してブリュンヒルトは続けた。

「わたし、ブリュンヒルトはキリシアの神の名において、ルブレシアが正しき信仰を行っていることを保証します」

その高らかな宣言を聞くと、大講堂は大歓声に包まれた。

「聖女ブリュンヒルト様万歳！ 聖女ブリュンヒルト様万歳！」

「神の威を借る騎士団は帰れ！」

「売国奴ヴィジンスキーは失せろ！」

ブリュンヒルトを讃える声と共に、ヴィジンスキーとアメルハウザーを批判する声も次々に拡大していった。その余りの熱気に、老いたヴィジンスキーは身の危険を感じたのか、隣のアメルハウザーに縋りついた。巨軀で隆々とした筋肉をもつアメルハウザーは口では大丈夫ですぞ、等とヴィジンスキーを宥めていたが、内心では、このまま群集によって殺されるのではないかとすら思い始めていた。

「静粛に。まだ話は終わっていません」

それを収めたのも、やはりブリュンヒルトであった。

「ヴィジンスキー！」

「……はい」

今の恐ろしい体験の間にかいた汗を、布で拭いながら、ヴィジンスキーは答えた。

「あなたのルブリン司教の任を解きます」

「なっ……な……」

ブリュンヒルトの言葉にヴィジンスキーは目を剥いたが、実際には、これはブリュンヒルトのヴィジンスキーへの配慮であった。このままルブレシアに彼を止まらせておくことは、彼の生命の為に、ルブレシア人の為にもならないと思ったのである。ブリュンヒルトは、ヴィジンスキーの為に、より凝り固まった信仰に犯された教皇庁の本部に新しい居場所を与えようと考えたのだった。

「そして今後、後任が決まるまでその任はわたし、ブリュンヒルトが代行します。あなたは教皇庁に帰還し、新たな任に就きなさい」

ヴィジンスキーがルブレシアから去り、敬愛するブリュンヒルトが滞在するということで、ルブレシア人の歓喜は頂点に達した。人々は万歳を叫び、ある者は酒を持ち出し、ある者はこの報せを市中の者に知らせようと駆け出した。

一方のヴィジンスキーの方も“蛮国”から教皇庁に行くということとは、即ち栄転である為、このブリュンヒルトの言葉を聴いて、不満を押しとどめた。

そしてこの喧騒の中でただ一人、何一つ得をしない、唯単にルブ

レシアにおける傀儡を失っただけのアメルハウザーだけが無然としつつ、ルブレシア人から呆れ、敵意、嘲笑の視線を浴びていたのであった。

序章 審問 ? (後書き)

どうもです。取りあえず、2章に入るまではできているので、そこまではそれなりの頻度(2、3日に一度更新しようと思います)

それ以降は毎週日曜日とかに更新できたらいいなー、と思ってます。もう一つの魔姫とツバサもよろしくお願いします。

序章 審問 ？

「さて、聖女も見た事だし、俺は帰る」

「ええ、わたしもそうしようかしら」

レオが立ち上がると同時に、イーダもそう云って席を立ち上がった。だが、そんな二人の背中に、声をかける人物が居た。

「お二方、少々お待ちを」

その声は若い女性の者だった。白い、背中の大きく開いた法衣を纏う、清廉とした印象の女性だった。彼女はレオたちに恭しく一礼し、その女性は告げた。

「ブリュンヒルト様がぜひお二方と話をされたいと云っておられます」

「聖女……様が？」

遅れながらも、レオはきちつと”様”をつけることができた。それはじっと視線を送る、イーダのおかげであった。

「ブリュンヒルト様が？」

二人のそんな反応を見て、女性は付け加えた。

「それで、どうでしょう？ 無理にとはいいませんが」

「いや、せっかくの機会だから行かせて貰うとするよ」

「ええ、ぜひご挨拶させてください」

二人から積極的な肯定を聞いた女性は、二人に法衣から覗く白い背中を見せて、云った。

「では、こちらへ」

☆ ☆ ☆

レオとイーダの二人が女性に導かれて近づくのを見て、ブリュンヒルトは軽く礼を取って口を開いた。

「こんにちは、レオ殿下、イーダ殿下」

その挨拶は、先ほどの審問の時のブリュンヒルトの声よりもずっと親しみやすい、穏やかなものだった。

「初めまして、ブリュンヒルト……様」

レオは自身とブリュンヒルトのどちらがより高位であるか、少し悩んだが、キリシア教のルブレシアに滞在する以上、王族と云えども敬意を払うべきであろうという結論に達した。

「別に敬称をつけなくてもいいのよ？ あなたにも異教の王子という立場があるでしょう？」

そう問うブリュンヒルトに、レオは自身の形の良い顎に手を当て、少し考えてから答えた。

「わたしはわたしの友人が敬意を払い、尊重しているものを同じように敬意を払い、尊重しているだけでございます、ブリュンヒルト様」

そして、その時のレオの黒い瞳は、真っ直ぐにブリュンヒルトを見つめていた。

「少し捻くれていて冷めているけれど……いい目をしているわね、レオ殿下。けれど敬意を払うということを何も言葉遣いで示さなくても良いのよ？」

レオを深緑の瞳で見つめ返しながら、ブリュンヒルトはにこやかに笑った。

「それじゃあ、お言葉に甘えることにするよ、ブリュンヒルト……」

そこまで云われたならば、固辞するのも逆に失礼ではないかと思いい、レオは頷いた。

「ええ」

ブリュンヒルトはそれ見て、整った顔を一際まぶしい笑顔に変えたのだった。そして、視線をイーダの方に移した。

「久しいわね、イーダ殿下」

少し、置いてけぼりを食らっていたイーダは、いきなりブリュンヒルトに話かけられて驚いたが、すぐさま丁寧に対応してみせた。

「お久しぶりです、ブリュンヒルト様。まさか、覚えてくださっていたなんて光栄です！」

「もちろん覚えていますよ、あなたの十歳の誕生日以来ですわね」

「ええ！ 本当に覚えてくださっていて光栄です！」

ブリュンヒルトがイーダにレオと同様のことを要求しなかったのは、イーダがキリシア教の王国の王女であり、王位継承者であるという立場からであり、そのことはこの場の三人ともが承知していた。

「……で何の用なのか？」

殊更に対等な立場を強調するように、そう問うレオに、朗らかにブリュンヒルトは答える。

「わたしの探している答えが、あなた達にある気がして」

「ブリュンヒルト様が探している答え？」

「それはなんだ？」

「まあ、それは置いておくとして。ねえ、二人に聞くけれど……」

疑問符を表情に浮かべる二人にブリュンヒルトは笑みを見せながら尋ねた。

「二人は恋仲なのかしら？」

その言葉に対して、

「はっ？」

とレオが、

「なったっ」

と、イーダがそれぞれ異なる音で驚きを表した。レオの方は良くわからないが、イーダの頬が少しだけ赤くなったのを、ブリュンヒルトは確認した。そして、レオの方も、微妙にイーダと目があった時、それを逸らしたのだった。そんな二人を見て、ブリュンヒルトはクスリ、と綺麗に笑いながら続けた。

「実は、今わたしは帝国の皇帝と異教徒のヤグルム朝の王女との結婚を模索しているの」

「そんなことが果たして可能なのでしょうか」

イーダが少し揺れた声で尋ねた。その揺れを自分でも自覚したのか、そこで呼吸をしてから、再びブリュンヒルトに質問した。ただし、その頬は、未だ確かに赤かったのだった。

「帝国とはキリシア大陸とキリシア教の守護者。その頂点に立つ皇帝が異教徒と結婚というのは不可能……なのでは？」

そのもつともな疑問に、ブリュンヒルトは答える。

「確かにそうだったわ。今までは。けれど、現実的な問題の前に、そのような宗教的な理由はかすんでしまうもののよ。わたしが云うことじゃあ、ないのだけれど」

「なるほどな」

ブリュンヒルトの言葉の意味を、レオは解したようであった。しかし、イーダはそうではなかった。

「どうということなの？」

「まあ、間違いなくそんなことが許されるかもしれない状況を作った一人は腹の中が黒々とした華麗なるハルガリア王だろうな」

「父が？」

「お前の父王は帝位継承権の戦争を有利に進めている。帝国にすれば隣国からの危機に比べれば、今、同じキリシア教徒との戦争で忙しいのに合理的な理由がないのにわざわざ異教徒と敵対する理由がないだろう？　まあ、それでもその決断は中々きついものだと思うけどな」

イーダの父ハルガリア王は現在、帝位継承を主張し、帝国へ侵攻している最中であった。今日、この場にルブレシアの王が居ないのも、ハルガリアとの同盟履行の為に王自ら帝国へ遠征しているからであった。

「なるほど……」

そのもつともな理由にイーダも頷いたが、戦争好きで、さらには

謀略にも富、梟雄と呼ばれる父がキリシアの秩序を乱しているという風にも聞こえる内容に、少しだけ声を落した。

「いや、別にお前やお前の父を責めているわけじゃあないんだぞ？ 帝国だって今まで同じキリシア教国家を攻めたことがあるだろう？ ほら、あの聖剣騎士団なんか宗教団体の癖に堂々と同じキリシア教のルブレシアを攻撃してくるんだ。別にハルガリア王だけが責められることじゃない」

そんなイーダを見て、レオは直ぐに必死になって付け加えた。

「うん……」

レオの言葉に、少しだけ嬉しそうにイーダは頷いた。ブリュンヒルトの見たところ、それはレオの言葉の内容よりも、レオの必死さによるもの思えた。

「まあ、つまり、ブリュンヒルトさ……」

ま、と続けようとしたレオを遮ってブリュンヒルトは自身を呼び捨てにするようにレオに迫った。

「ブリュンヒルト」

「……ブリュンヒルトがその状況を利用して狙っているのは恐らく……」

本当に呼び捨てにしてよいのか迷いながらも、結局はブリュンヒルトの意向にレオは従うことにした。そして、ブリュンヒルトの真の目的を口にした。

「宗教間の共存」

その言葉は、ハルガリア人でありながらルブレシア暮らしが長いイーダやリヴォニア人であるレオにとってそう遠くない、身近なものだった。けれど、依然として、世界全体ではそれはごくごく狭い世界に過ぎなかった。

「ええ、その通りよ」

レオの推測が正しいことをブリュンヒルトは肯定した。そして、ブリュンヒルトは話を始めの、二人は恋仲なのか、という問いに戻した。

「あなた達もし恋仲なら、異教徒とキリシア教徒の王族の恋でしょう？ 話を聞こうと思って」

「いや、そう云われても……」

どんな表情をすればいいのか、どう答えるのがいいのかわからなのまま、レオがそれだけを云うしかできなかった。自身、イーダにまったくそういう感情がないとは言いつけなかったし、イーダも恐らくそうであるであろうと思っていた。それ故に、完全に否定するとイーダを傷つけるのではないか、という考えが浮かんだ。だが、だからと云って、今が異教徒の王族同士の恋沙汰が許される時代であるとも思えなかった。

「隠さなくていいのよ？ わたしなら、二人の力になってあげられるし」

その一言に、レオもイーダも心を揺さぶられた。けれど、それでも二人は胸の奥にある気持ちを口にするのは躊躇われた。

「べっ、別に私はレオとそんなんじゃない……」

そう先に声にしたのはイーダであった。

「……まあ、そうだな」

イーダがそう答えた以上、レオはそういう他なかった。しかし、二人はこの時、大切なものを放置していることを自覚していた。

「ふーん、なら良いのだけれど……」

そんな二人を少し残念そうに見つめながらも、ブリュンヒルトは二人の気持ちを確実に汲み取っていた。そしてそれは、いつか、何百年も前に彼女が通った道であった。ブリュンヒルトは、密かにこの二人の行く末を応援しようと思ったのだった。

☆ ☆ ☆

「これは、これは聖女ブリュンヒルト様とあろう者が、異教の王子と歓談とは……気をつけなければ、あなた様の品位が下がったり、あらぬ誤解を受けてしまいますぞ」

慇懃な声が、レオとイーダの背後から空気を振動させた。そして、その声の少々、粘着質的なものに覚えがあった二人は、うんざりとした気持ちになった。

「失礼ですが、あなたは？」

そんな二人の様子から、余り好意的になれそうにない相手であることは直ぐに伺えたが、聖女という立場から、丁寧なブリュンヒルトは会話に突如として乱入した男に対応した。

「ブジャル侯爵のイラノフと申します、ブリュンヒルト聖下」

そう名乗った男は、金髪の青年だった。まだ、若く、恐らくレオと同じ年ぐらいであった。背も、長身のレオとほぼ同じ位で、少し低いぐらいだろうか。その容姿は、まず、十人がいれば八人が美男子と称するであろう位には整ってはいいる。だが、ブリュンヒルトのような星々を纏ったごくの金髪に比べて大部暗い色をした金髪と、常に下目で人を見下すような表情をしていることと、そして何よりもその陰湿な人間性がとめどなく全身から溢れていることが、初対面の人間に嫌悪感、というよりも警戒心を喚起させた。

「ブジャル候、私の品位はもとよりさほど高くありませんし、レオ殿下のような教養ある方と会話して私の決して高くない品位がより下がるとは思えません」

ブリュンヒルトは知らなかったが、事実、レオは法学部でもっとも優秀な学生であり、この点でレオの教養は帝国やハルガリアの大学の人間と比べれば劣るかもしれないが、ルブレシアやリヴォニアにおいて十分過ぎるものであった。そして、その事実をブリュンヒルトの発言によって思い起こしたイーダが、珍しく痛烈な言葉を口にした。

「レオは法学部の首席だものね、どこかの誰かさんは次席だけれど」

このような事を、普段は優しく温厚なイーダが云うことは珍しかった。しかし、イーダはイラノフがしばしば影で、ハルガリア人でありながら”王位継承者”である自身の、そして何よりもレオのことを中傷していることを知っており、イラノフに対してだけはどうしても好意的にはなれないのだった。

「ちっ」

事実を指摘されたイラノフは舌打ちして、イーダと、レオと、そして、自身の敬うべき聖女ブリュンヒルトを一にらみして去って行った。

「なんだ、あいつ？」

レオのイラついた声を聞いて、ブリュンヒルトは苦笑した。

「レオ殿下とブジャル候は仲がよろしくないのかしら？」

その問いに答えたのは、レオではなく、イーダであった。

「ブリュンヒルト様はこんな辺境の小国の事は余り存じないと思いますが、ブジャルはルブレシアの東端にある侯領で、かつてリヴォニアとの戦争で最大の戦場となった地域ですから……ブジャル侯爵家のリヴォニア嫌い、異教徒嫌いは有名なのです」

「なんでも、”前”司教卿下であらせられたヴィジンスキー氏の従兄弟だそうで」

レオが殊更に”前”を強調したのは、もちろん、ヴィジンスキーに対する揶揄からである。

「なるほどね……」

二人の説明に、ブリュンヒルトは納得したが、一つのことを気にしていた。

「ルブレシアは異教徒と良く付き合っているのだと思っていたのだけれど……」

それが、宗教間の共存という、ある種の自身の理想郷をルブレシアに重ねていたブリュンヒルトがイラノフのレオに対する態度から思ったことであつた。

「まあ、そういう人たちが多数派であるのは間違いない」

「そうですよ、ブリュンヒルト様」

二人がブリュンヒルトの考えを察してそう口々に云うと、ブリュンヒルトは感謝を示した。

「ええ……そうよね。レオ殿下も、イーダ殿下もありがとう」

ブリュンヒルトの言葉が終わったその時、タイミングを見計らっていたであろう、レオとイーダをこの場に呼んだ女性がブリュンヒルトに、ルブレシアの国会議長が面会を求めていることを伝えた。

「ごめんなさい、私、国会議長に呼ばれたので、失礼させて貰うわね」

申し訳なさそうに長い睫を伏せるブリュンヒルトにレオとイーダ

の二人は、名残惜しさを感じながらも笑顔で答えた。

「はい、ブリュンヒルト様、またお会いしましょう」

「わかった」

二人に見送られながら、手を振って、じゃあね、とブリュンヒルトは云って、二人に長い金髪で覆われた向けて行った。

序章 審問 ? (後書き)

次は明後日あたりに更新します。

うーむヒロインが可愛くない W

第一章 会遇？（前書き）

ここから先は時系列的には本編の半年ほど前になります。
レオとイーダ。この二人の出会いの物語になります。
この話は前編・中篇・後編でお送りいたします。

第一章 会遇？

「イーダ殿下、どうかなされましたか？」

そう主に声を掛けたのは、ブラウンの髪をした、少女だった。侍女らしい服を身に纏っている彼女の、可愛らしい薄茶色の瞳の光は、心配そうに揺れていた。

「いいえ、なんでもないわ、エルネア。少し疲れただけよ。ないけれど……」

侍女——エルネアの問いに、答えたのは、少女の主であるイーダという少女であった。同じ少女、という枠にあっても、”純朴そうないい子”という印象のエルネアよりは大人びて見えるイーダは、気品と少しだけ勝気さが滲んだ目元が特徴的な少女だった。そして、身に纏っている幾分煌びやかな衣装も、なんら問題なく彼女の美しさを飾り立てていた。

だが、そんなイーダの、最も目を引くのは、その腰まで伸びた銀髪だった。”月明かりのような”とハルガリアの上層社会で羨望を惹くその銀髪は、今は亡き、母譲りのもので、イーダ自身の自慢でもあった。

「ハルガリアが懐かしくなったのでは？」

エルネアがそう問いかけると、イーダは口元を綻ばせて苦笑した。

「まさかたったの三日で故郷を懐かしく思ったりしないでしょう？」

イーダの言葉に、エルネアはあわてて謝った。

「それもそうですね……すいません、早とちりしちゃいました。確かに馬車は揺れますし疲れ……」

「ぐあっ！」

エルネアの言葉を遮るように、突如として悲鳴が響いた。続いて、突然、馬車が止まった。そして、あちらこちらで悲鳴と怒号、そして金属がぶつかり合う音が連鎖するように広がっていった。

「どうしたのです？」

イーダが止まった際の衝撃に耐えてから、馬車の中から外へ向かってイーダが問い抱えたと、一人の男が馬車の幕を捲った。イーダの護衛の騎士の一人であった。

「殿下っ！ お逃げ下さい。ここは持ちませぬ」

その声には焦りがあり、その背には大きな矢が突き刺さっていた。イーダは、その言葉を耳にすると同時に騎士が捲った幕の先に、黒ずくめの男たちと、護衛の騎士たちが戦っているのが見えた。それで、イーダは何が起こっているのか、全て理解した。

「逃げるわよ、エルネア」

そう云って、イーダは侍女の手を引き、外へ飛び出そうとした。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「レオ殿下、お待ち下さい」

数人の男たちに呼び止められて、レオは馬を走らすのを止め、振り向いた。

「なんだ、だらしないな」

「そうは云われても、我々は殿下ほど上手く馬を操れません」

ようやく追いついてから、男たちは口々にそう云った。

「だが、今中に南部を抜けなければ、ハルガリア王女イーダより先に王都に帰れないではないか。いや、既に我らよりもイーダ王女が先を行っている可能性すらあるぞ」

「それはそうですが……」

男たちの同意の声に、レオは勢いよく続けた。

「イーダ王女がルブレシアの玉座を継承する可能性はそう高くないにせよ、万が一には我がリヴォニアの隣国の女王となる人物だ。礼を欠くわけにはいくまい。なんとしても王都で出迎えるぞ」

「……了解です」

「さあ、がんばれ！ 今日中に次の街に着かなくては」

仕方なく頷いた男たちに、レオが笑って励ますように云った、その時である。

「もし、その騎士さま」

突然、声を掛けられると、男たちに僅かながら緊張が走った。男たちはレオを庇うように、声を発した人物の前にレオへの道を塞ぐような体勢を整えた。女性の声ではあったが、その女性はマントのフードを深く被っていたのである。若干の怪しさを感じざるを得なかった。

だが、外套の女性が跪くと、男たちは幾分か警戒を弱めた。それはレオも同様で、優しく跪く女性に声を掛けた。

「俺に話しかけているのか？」

云いながら、レオはフードの中の顔を、馬上から観察した。見た限りでは、相当、目鼻の整った女性のように、しかも、まだ若く、自身と同年ぐらいにも見えた。そして、フードの中で髪をかきあげているようではあったが、耳の辺りに僅かに銀色の毛髪を見ることができた。

「はい、騎士さま」

「なんでしょうか、お嬢さん」

怪しみながらも、レオは優しい声でマントの女性――というより

も少女に、レオは問った。

「私は、ハルガリア王女、イーダ殿下に仕える侍女でございます、騎士さま」

「イーダ王女のか？」

レオは少女の言葉に驚きと疑念が混じった表情を作った。レオの手前、男たちは黙って少女の話を聞いていたが、レオと同じような表情を浮かべ、互いに顔を見合わせている。

「はい、それで騎士さま、お願いです、どうかイーダ王女を助けて下さい」

だが、そんなレオたちに少女は必死になってそう続けた。その声には切実な感情が込められていて、演技には思えなかった。

「どういうことだ？」

結局、レオは話だけは聞くことにしたのである。

少女は自身のことをエルネアと紹介し、自身たちがルブレシアの王都へ向かう途中で何者かに襲撃を受けたこと、そして王女と離れ離れになってしまったことを告げた。

「……わかった。直ぐに駆けつけよう」

それを聞いて、レオはすぐさまそう云った。だが、茶色い髪をしたりヴォニア人の一人が、それに対して少々懐疑的に尋ねた。

「よろしいのですか、殿下」

「罨だというなら森かどこかに誘い込むだろう。この道の先で王女と離れ離れになったというなら、どっちにせよ王都への通り道ではないか」

「……ですが、その前に一つよろしいでしょうか」

「なんだユルギス？」

尚も、そのリヴォニア人——ユルギスはレオに食い下がった。

「そこなお嬢さん、なぜ殿下の前でフードを被っている？ 非礼ではないのか？ それともフードを取ると不都合なことでもあるのか」

ユルギスの問いは確かに最もであるので、レオも少女の方に視線をやって、フードを取るように促した。しかし、少女が俯きながら、おどろおどろしく、

「私は、アダ教徒ですので……」

と云うのを聞いて、ユルギスは謝罪した。

「む……それはすまなかった。それならフードを取ることはない」

「ありがとうございます、騎士さま」

アダ教徒は厳しい戒律を持つ少数宗教で、他者に極力顔を見せてはならないという戒律があった。

「……ああ、一つ云っておくが、俺たちは騎士ではない。リヴォニア人だ。俺たちもキリシア教徒ではない」

その言葉は少女がキリシア教徒ではないということにレオが親近感を覚えたからだだった。

「えっ？」

リヴォニア人、という単語にエルネアと名乗った少女は驚いたようであった。

「こちらに居られるのは、リヴォニア大公国の王子、レオ殿下だ」

「そ、それは失礼しました」

驚き、深々と頭を下げる少女に、レオは苦笑しながら、自身の馬の後ろを示すように叩いた。

「さあ、後ろに乗れ、エルネア」

一国王子が気安く人を同じ馬に乗せる、という事実には驚いている少女に向かって、レオがからかうように云った。

「なんだ？ 異教の王子が怖いのか？」

「いいえ、殿下。私もキリシア教徒ではありません」

少女は、レオの問いにきっぱりと、そう答え、驚きを捨てて、レオの後ろに跨った。

「ああ……なら、しっかり捕まっているがいい」

少女は少し戸惑ってから、レオの言葉どおり、レオの背にぎゅっと腕を回した。だが、そこには薄い、だが、はっきりと固い鎧のよなものがあり、少女は自身の心配が杞憂であったことに気付き、少しだけ赤面する想いだった。

レオ以下、リヴォニア人たちと少女は、少女が現れた方へと馬を疾駆させた。

第一章 会遇？（後書き）

ホーネットです。

第一章 会遇？

「何をしている、お前たちっ！」

エルネアの案内の先、行く手に見えた人だかりに向かってレオがそう叫ぶと、人だかりの面々はレオの方にびくつきながら振り返った。身なりからして、この辺りの農民のようであった。

「き、騎士さま……いえいえ、なんでもございませぬ」

農民の声に鼓膜を震わせながら、レオは、惨劇の場を馬上から一覽した。そこには二十人ほどの騎士たちの遺体が散乱していた。

「これはひどいな。恐らくキリシアを信じぬ雇われの荒れくれ者の仕業だな」

レオがそう考えたのには理由があった。騎士たちのほとんどは、石弓によって倒されていたのである。石弓は、分厚い甲冑を貫通する強力な武器であるが、キリシア教徒がキリシア教徒に使うのを教会が禁止している武器であるからであった。全うなキリシア教徒のすることではなかった。

騎士の遺体の他に、馬を殺された四台の馬車が、道に転がっていた。農民たちは、恐らく騎士たちの遺品や、これらの馬車に積まれていた高価な品々に手を出そうとしていたに違いなかった。そんな農民たちをレオは軽く睨み付けながら、馬車の一つに、ハルガリア王家の紋章が大きく表してあるのを見て、レオたちは少女の言葉が真実であることの確証を得た。

「よし、お前たちは王女を探せ。それから、そこな農民よ」

ユルギスたちが、周囲を調べ始めたのを確認してからレオは農民たちに向き直った。

「はい、なんですか騎士さま」

「これを受け取れ」

レオは懷から、数人いる農民たちに一人に一枚ずつ金貨を投げ渡した。

「はっ……？」

地面に無造作に放り投げられた金貨を手にしてから、農民の一人が軽く歯を立てて、それが本物であることを確かめ、そして次に驚きながらレオに尋ねた。

「こ、これは……ほんとうに頂いてよろしいのでしょうか？」

「構わない。ただし、この騎士たちの遺品には手をつけず、埋葬する準備をしている。後で別に人も寄越す。……万が一、この遺体の遺品に手をつけるようなことがあれば……」

「お優しいんですね、殿下」

農民たちを威嚇するように剣の柄に手を掛けたレオの直ぐ後ろで、少女の悲しい声が聞こえた。少女の立場からすれば、仲間の死であり、それは当然と云えた。

「リヴォニア人は勇士の国だ。例え異教徒でも主の為に死んだ勇士に敬意を払うのは当然だ」

レオが少女の言葉に毅然と答えていると、ユルギスがリヴォニア人一同を代表してレオに報告した。

「イーダ王女はどこにもいません」

「誘拐されたか、逃げ延びたか……」

レオがそう呟いたその時、道の脇にある林の当たりを調べていたリヴォニア人の一人が叫んだ。

「殿下、こちらに枝を踏んだ跡がございます、そしてこの先の木々には石弓が刺さった跡が……」

どうやら、王女は林の中へと難を逃れたようだった。

「ここからは危険だ。お前はそこで待っている」

レオは自分にしがみついている少女に向かって、そう云った。この林の先には、明白な危険が、形を成して襲い掛かってくるに違いなかったからである。

「……はい。どうか、どうか殿下のことをよろしく願います、レオ殿下」

少女は少しだけレオの言葉に反発しようとしたが、結局は、目の前の異教の王子に従うことにしたのであった。

「もちろんだ」

レオは少女を馬からおろし、フードから微かに覗く、銀髪を垣間
見ながら強く答えた。

第一章 会遇？（後書き）

ところで、シリーズ化という機能がついていたのですね。知りませんでした。

この”ルブレシア戦記”は第一巻としてこれ一つで話として完結させてしまおうと思っています。分量的には小説一冊分、1600字の原稿用紙で90枚ぐらいになる予定です。（現在43枚目）

お読みいただいております。ありがとうございました。

感想等おまちしております。

第一章 会遭？

「そっちへ行っただぞ！」

息が上がった声で、男が叫んだ。薄汚いぼろを着た、彼の巨体から、碌に手入れをしていない頭髪の毛穴から汗が吹き出て、地面に滴り落ちる。

「わかっているが、あいつ思ったよりもすばしっこい！」

「石弓は？ 誰か余ってないのか！」

「もうみんな撃っちゃった！」

そんな仲間の声を聞きながら、また別の男も幾分、先の者よりは余裕を持ちながらも表情に疲れを垣間見せていた。

「はあ、はあ……」

だが、追いかける側である彼らよりも、追いかける側の少女の疲労の方が推してしかるべきであった。特に激しい運動をしたことがない、ハルガリア王家の紋章が入った外套を纏った少女は、肉体的にも、精神的にも限界が近づいていた。

だが、それでも少女は走るのを止めなかった。

「っ！」

しかし、そんな少女の前に、敵の仲間が現れた。咄嗟に、少女は

前へ走るのを止め、横手に抜けようとした。だが、そこにも敵の間が大きく迂回し、回りこんでいた。

「おっと、こっちも行き止まりだ」

「……」

「でかした」

男の一人が、野太い声でそう云った。雰囲気からして、この男が追跡者たちのリーダー格のようだった。

「さて、イーダ殿下。あなたには死んで貰わねばなりません……ん？」

慇懃、かつ恭しいその表情を、男はあることに気が付いて、始めに、疑問へ変え、そして次に、怒りに変えて、怒鳴ろうとした。

「おい、待て、こい……」

だが、その怒鳴りは、闖入者によって遮られることになった。

「死ぬのはお前だっ！」

不意に、横手の草むらから、一人の青年が飛び出し、リーダー格の男に切りかかった。黒髪的美青年、レオである。

「なっ！」

その短い、意味の無い音が、男が放った最後の声であった。それはレオの剣が、次の瞬間には男の喉を引き裂いた為であった。男は

頸部から凄まじい血雨を降らせながら、物言わぬ身体となって、地面に倒れた。レオはそれを一瞥することもなく、少女と他の男たちの間に、少女を守るように割って入った。

「何だこいつ!？」

リーダーの死に、動揺する男たちはそういいながらもレオと戦おうと武器を構えた。だが、その時既に別方向からユルギスら、他のリヴォニア人が男たちに襲い掛かってきた。

「イーダ王女を守れ！」

レオの号令に忠実に、場に躍り出たリヴォニア人は相手を切り伏せることよりも、男たちと少女の間に割って入ることを優先し、円陣を組むことに成功した。

「糞、こんなガキ共にっ！」

見るからに二十にも届いていないレオたちにまんまと円陣を組まれた男たちの一人が、苦々しくそう口にした。それに答えたのはユルギスであった。

「ふん、我々リヴォニア人は十二で戦に出る。既にいくつもの戦場を経験している我々がお前らのような山賊崩れに負けるものか」

「これで王女は安全だ。目の前の敵を倒せ！」

ユルギスの台詞に続いて、レオがそう号令を掛けた。円陣の中央に王女を置いたレオたちは味方が誰も倒れなければ、王女の安全にさほど気を使わなくとも良い状況になっていた。

そこから先の戦いは一方的であった。元来、戦闘民族と自他に認めるリヴォニア人と、もともと武器を持たないような人間をいたぶることを生業にしている男たちとの戦力差は歴然であった。数では男たちが優勢なはずではあったが、その数の差も、三十秒もしない内に逆転され、最終的に一分足らずで、男たちは全員、戦闘能力を奪われた。男たちが、ハルガリアの護衛騎士を倒すことができたのは、禁じ手ともいえる石弓のおかげに過ぎなかったのだ。

「倒れている奴で生きている奴を探せ。今回の一件の首謀者を吐かせる」

短く、あっけなかった戦闘の後に、レオはユルギスたちにそう命じて、レオは自分たちが守った少女へ話かけた。

「……イーダ王女、お怪我はありませんでしたか？」

「……………」

だが、少女はフードから、困ったような、それでいて少し焦ったような表情を浮かべるだけで、終止無言であった。

しかし、それでも、レオはそのことを不審に思うでもなく、むしろ、得心がいったように小さく笑った。

「やっぱりな……」

レオがそう小さく云った、その時、リヴォニア人の一人が警告を発した。

「殿下危ない！」

レオが声のした方を向くと、血まみれになって倒れていた男の一人が、最後の気力を振り絞ってレオに向かって飛び掛ろうとするところであった。

「ちっ」

レオが舌打ちをして、少女を庇うようにしながら、再び剣に手を掛け、迎撃しようとしたその時、一本の短剣が高速で飛来し、男の頸の後部に鋭く突き刺さった。

「かっ……」

男が、完全に絶命するのに続いて、レオやリヴォニア人たちが短剣の飛来した方向を見ると、そこには、安全の為に林に入る前に置いて来た筈の、フードを被った異教の侍女が居たのだった。

「はぁ……ハルガリアの侍女って凄いなぁ……」

リヴォニア人たちがその武技に感嘆の声を上げるのを耳にしながら、レオは、彼らリヴォニア人が驚く事を云ってのけた。

「イーダ王女、危ないからこちらへはいらっしゃらないようにいいましたよね？」

レオがそう告げた相手は、リヴォニア人たちが侍女だと思っていた少女に向けてであった。レオの言葉に、リヴォニア人はもちろん、少女の方も一瞬だけ幾分驚いたように身を固くした。だが、直ぐに

「……私がイーダ王女とどうしてわかったのでしょうか？」

そう云って、外套のを脱ぎ捨てた。そこには品と質が共に高い衣服と、何よりも”月明かりのような”銀髪があり、それが、侍女だと名乗った少女こそ、本当のイーダ王女であった事の何よりの証であった。

「イーダ王女は長い銀髪が美しい女性だという。あなたはなるべく隠そうとしていたが外套から銀の髪が少し覗いた」

レオがイーダの髪を見つめながらそう云うと、イーダは続けて尋ねた。

「それだけかしら？」

「あなたは侍女だといいながら、ルブレシア語が堪能で、こちらは王女であるにも関わらず、私がルブレシア語で話掛けても、雰囲気の意味は解しているようではあっても、喋ることはしなかった。と、云うより、ルブレシア語を喋れないようだった。余りに王女と侍女の教養がちぐはぐだ」

「なるほど……」

ユルギスたちは自分の主の観察眼に敬服したように声を漏らした。

「そして、こちらの女性は、森の中、目立つ王家の外套を纏い逃げていた。脱げばいいのにも関わらず、だ。そして――」

「そして？」

一度そこで言葉を区切ったレオにイーダが促すように問うと、レオはイーダが倒した男に突き刺さった短剣を示して続けた。

「そして、王女は多才で武芸にも秀でているという。ついでに、この短剣にも王家の紋が刻まれている」

「さすがレオ殿下。我が父からあなたの神童ぶりは耳にしています。だが、まさかこれほどまでの慧眼の持ち主とは思いませんでした」

イーダの心からの賞賛を聞いて、レオはもちろん、悪い気はしなかった。だが、一つだけどうしても聞かねばならなかったことを思い出し、レオは表情と声を若干引き締めた。

「一つ聞いてよろしいか、イーダ王女」

「何かしら、レオ殿下」

レオの雰囲気は少し変わったのを感じとって、イーダも表情を少しだけ固くした。

「なぜあなたは嘘をついた？」

イーダはその問いに答える前に、自身の身代わりになってくれた少女――侍女エルネアの方へと静かに歩みより、その小さな肩を抱いた。

「だって私が王女とわかれば、あなたたちが私の身の安全を優先して、この子を助けに行ってくれないと思ったのだもの」

「……」

イーダの言葉に、レオやリヴォニア人はむっつりと黙りこくってしまったので、イーダは申し訳なさそうにレオに尋ねた。

「騙されて気を悪くしてしまったかしら？」

「いや、ただ……」

レオがイーダに答えようとしたその時、ユルギスが主の声を遮ってまで、イーダに対して大きな声を張り上げた。

「イーダ殿下、我々を見くびらないで貰いたい！」

そう云うユルギスをレオが宥めた。イーダ自身はまったくそんな様子はなかったが、ルブレシア語が聞き取れない侍女の少女の方は、ユルギスの大きな声に怯えたようでもあったからであった。

「？」

イーダはユルギスの怒りがどういうことか、いまひとつ理解できず、疑問符を顔に浮かべていた。そんなイーダにレオはユルギスほどではないにしても、それなりに強い口調で云った。それはリヴォニア人としての誇りがユルギスを、レオをそうさせたのであった。

「つまり、例えば王族ではないとしても、我々が困っている女子を見捨てると思うのか、ということだ」

「いいえ、今はそうは思わないわ」

レオたちリヴォニア人の心中を理解したイーダがそう、僅かな曇りもなくはっきりと口にしたのを聞いて、リヴォニア人たちは表情を柔らかくした。レオも、引き締めた表情を緩め、穏やかな笑みを浮かべた。それは、とても良い笑顔で、人を惹きつける何かが、間違いない。イーダも、その笑顔に惹かれ、無意識のうちに右手を差し出していた。そして、そんな自分に少しだけ驚きながらも、次の言葉を自然のうちに紡いだ。

「よろしければ、レオと呼んでいいかしら？」

レオはイーダの白く、滑々とした手を握り締め、朗らかに答えた。

「イーダと呼ばして貰えるなら」

レオの方も、侍女を見捨てるではなく、最後には自ら救おうと林の中まで追ってきた、異教の美しい姫との出会いに運命的なものを感じざるを得なかったのだった。

運命の歯車が、かちり、と絡み合い、動き出した。

第一章 会遭？（後書き）

以上、第一章 会遭でした。いかがでしたでしょうか？

次は第二章、騎士試合です。

第三章からは更新ゆっりめの予定です。ハハ

第二章 騎士試合？

聖女ブリュンヒルトの審問から数日、ルブリンではヴィジンスキーの教皇庁への出向、そしてブリュンヒルトの司教就任の熱気からようやく冷め始めていた。

そんなある日、レオが昼過ぎに講義を終え、屋敷に戻ろうとしていたら、中庭にここ数日と同じ光景が広がっていた。

「……何を読んでいるんだ？ ブリュンヒルト」

そこでは、ブリュンヒルトが静かに読書していた。降り注ぐ木漏れ日を浴びながら、優雅にページを捲る、金髪の美女は非常に絵になる光景だった。

「レオ殿下、“英雄伝”を読んでいたの」

「そんな貴重な本をこんな外で……」

本、というのは手で書き写すか、魔術で写しを取るしか生産方法がない。その為、非常に貴重なもので、外に持ち歩いている人間を、レオはブリュンヒルトの他に見たことがなかった。

「大丈夫。ちゃんと保護する魔術をかけていますから、濡れないし、燃えないようになってるの」

レオの疑問に、ブリュンヒルトはそう答えた。

「なるほど……それにしても、ブリュンヒルトはいつも読書しているんだな」

聖女ゆえに成せる業に、レオは感心しながらもブリュンヒルトに尋ねた。なぜならば、ここ数日、レオがいつ中庭を訪れても、ブリュンヒルトはここで本のページを捲っていたからである。

「私、暇なのよ」

そう悪戯っぽく笑うブリュンヒルトに、レオは云った。

「聖女兼、司教が暇な筈はないだろう？」

聖女の仕事がどんなものかは、レオの知るところではなかったが、ルブリン司教が決して暇な役職ではないことを、レオは知っていた。先任のヴィジンスキーは不愉快な人物ではあったが、日々、大量の仕事をこなしていた点を、レオは認めてはいたのだ。

「そんな気も、しないではないわね」

ブリュンヒルトのそんな返しに、レオは何を云っても無駄だと思つて、ここ数日、気になっていたことに話題を変えた。

「そういえば、前から聞きたかったんだけど」

「何かしら？」

「何で俺に呼び捨てにするように云ったんだ？ 確かに、俺がブリュンヒルトに”様”をつけるのは立场上、微妙だ。だけれど、俺が呼び捨てなのにブリュンヒルトだけが俺に”殿下”をつけるのは、

聖女の立場としてどうなんだ？」

レオのいうことは正しかった。恐らく、聖女が異教の王子に一方的に呼び捨てにされるといいう今の状況はルブレシアだから受け容れられているだけで、他のキリシア諸国では通用しないに違いなかった。

そんなレオの問いに、ブリュンヒルトは少しだけ寂しそうに答えた。

「……他のみんなは私のこと聖女様！ 聖女様！ って感じでしょう？ その点、あなたは異教徒だから気が楽なのよ」

「……もしかして、最初に敬語を辞めるように云ったのはその為？」

レオが尋ねると、ブリュンヒルトは小さく頷いた。

「ええ、だって私も少しは聖女としての私以外の私と会話してくれる相手が欲しいわ」

その言葉の意味を、レオは考えた。聖女。数百年を生きる、キリシア教徒の崇拜の対象。崇拜の対象というのであれば、王族であるレオも同じであった。だが、レオには気のおけない友人がいた。形式上は臣下でも、対等でなくとも、友はいる。だが、ブリュンヒルトはどうであろうか。彼女にも、かつては友がいたはずだった。だが、その友たちは、いずれもブリュンヒルトを残してこの世を去っていったのではないだろうか。そして、生まれながらにしてブリュンヒルトを敬うように教育されたそれ以後の世代に、ブリュンヒルトは心安らく相手を見出すことができなかったのではないだろうか。

「なら、今日から俺はレオ殿下じゃなくてレオだな」

そんな言葉が、レオの口から出たのは、これだけ色々考えた結果では、決してなかった。ただ、自然と、ブリュンヒルトに自分がかかるべき言葉がするりと口をつく。

「……いいの？」

ブリュンヒルトが、ぱちり、と瞬きしながら尋ねた。

「友達……だろ？　俺たち」

そんなブリュンヒルトに、レオが告げた言葉はそんな青臭いものだった。

友達、という響きが、自分に向けられるのはいつ以来のことであっただろうか？　そうブリュンヒルトは自分に問いかけた。かつて、まだブリュンヒルトが聖女ではなかった頃、ブリュンヒルトにはたくさんの友人が居た。だが、ブリュンヒルトが聖女になってから、友人たちとの付き合いは段々ときちなくなっていく、そして、最後に友人たちは老いないブリュンヒルトに先立って逝ってしまったのだ。

そんな思考を巡らせてから、ブリュンヒルトの翠の瞳がレオの黒い瞳を見つめた。この黒髪の異教の王子が、ブリュンヒルトの数百年ぶりに出来た友達であった。その事実は数百年ぶりに、ブリュンヒルトの胸に何か大切な暖かさを灯した。ほんの少しだけ、けれどもどうしようもないぐらいに、涙が出そうになったのを耐えながら、ブリュンヒルトは、いつも見せる大人らしい、綺麗な笑顔ではなく、無邪気な少女のような笑顔を浮かべながら、

「ありがとう、レオ」

そう、震えそうな声で云ったのだった。

第二章 騎士試合 ? (後書き)

更新遅くなりました。

連載ストックはあるのですが、なるべくコンスタントに更新したいので、ほどほどに日を空けて更新しています。

感想等お待ちしております

第二章 騎士試合？

ブリュンヒルトの笑顔は、レオにとって不意打ちであった。そして、その時、自分のした選択が正しく、そして、予想以上に、ブリュンヒルトにとって大切なものになったということを知った。

「そういえばここ最近やけに騒がしいわね」

ブリュンヒルトが、明るく、レオの思考を遮るように云った。

「ああ……もう直ぐ建国祭があるからな。というより、ブリュンヒルトは建国祭に出席したことはないのか？」

「確かに、昔もそんなのあったわね。楽しみだわ」

ブリュンヒルトは遠い記憶から、建国祭に出席したことを思い出してそういった。だが、人事のように云うブリュンヒルトにレオはある事実を指摘した。

「というか、何で今思い出したようなことを云ってるんだ？ 建国祭を取り仕切っているのはルプリン司教だぞ」

「……そうだったかしら？」

「そうだ」

誤魔化すようなブリュンヒルトの言葉にレオはにべもなくそう断言した。

「……………」

「……………」

どう誤魔化すか思考するブリュンヒルトとそれを待つレオの間にしばしの間、沈黙が走ったが、やがてブリュンヒルトは言い訳するように口を開いた。

「だって聖女の仕事だけでも嫌になるのにルブリン司教の仕事なんて手が回らないのだから」

「自分から進んで引き受けていたような……」

その言葉は事実だったが、これにはブリュンヒルトは反論することができた。

「でもあの場はあしておくのが一番だったでしょう？」

「確かにそれは認める」

ブリュンヒルトの云うとおり、あの審問の場を見事に収めたのは、間違いなくブリュンヒルトの行動によってであることは間違いなく、レオもちろん、その事を認識していたので、そこは素直に頷いたのだった。

レオの言葉を少しだけやり込めた後に、ブリュンヒルトは

「まあ、安心して、たぶん、部下が上手くやってくれるから！」

と付け加えた。

「部下？」

「あの審問の日にあなたとイーダ殿下をわたしのところまで連れてきた人よ」

「確かにあの人はしっかりしてそうだな」

「あの人も、よ」

ブリュンヒルトのその言葉にレオが反論し掛けたところで、ブリュンヒルトが話題を変えた。

「あら？ 大学で何をしているのかしら？」

レオが追ったブリュンヒルトの視線の先には、数人の男の学生が、各々に武器を持って何かしている光景があった。

「あれは騎士試合の練習だな」

それはレオが去年も見ただことがある光景だったので簡単に答えることが出来た。それは、騎士試合の練習であった。

騎士試合、というのはキリシア教諸国の各地で行われている、貴族や騎士階級の決闘大会を指すのだが、ここでは、ルブレシアの建国祭で行われる騎士試合のことを指していた。

レオのその答えに、ブリュンヒルトは建国祭のメインイベントとも云えるその存在を思い出したようであった。騎士試合は、キリシア諸国で行われて

「へえ……そういえばそんなのもあったわね」

「大学に在籍しているのはいいところの子女だからな。騎士試合に出場する面子とほとんど重なるんだ。まあ、帝国やハルガリアの大学から一時帰国して出場する奴もいるけどな」

レオがそう説明すると、ブリュンヒルトは得心がいったように相槌をうっていたが、不意に思い出したように手を叩いた。

「レオは練習しないの？」

「俺は出ないぞ」

レオが短くそう答えると、ブリュンヒルトはすばやく問いを重ねた。

「どうして？」

「そもそも“騎士”ってのはキリシアの概念だからな、異教徒の俺が出るわけにはいかないだろ。それに考えてみろよ、前までの建国祭の責任者を考えてみろよ？」

レオがブリュンヒルトに指摘した通り、建国祭の責任者はルブリン司教である。そのルブリン司教座はつい数日前まで、ルブレシアの反異教徒の筆頭とも云うべき老人、ヴィジンスキーが就いていたのである。そのヴィジンスキーは留学している隣国王子に騎士試合はもちろん、建国祭そのものの招待状さえ出さなかったのだ。

ブリュンヒルトも、ヴィジンスキーが前回の建国祭の責任者であ

ったことを思い出し、苦笑するしかなかったが、直ぐに悪戯っぽい笑顔を浮かべて云った。

「あははは……でも大丈夫よ」

とっさにその言葉の意図を理解しかねたレオが返答できずにいると、ブリュンヒルトはにこやかに云った。

「今年からの責任者は私だもの」

「はっ？」

啞然と口から音を漏らしたレオが冷静になるまで数秒ほど時間が必要であった。だが、確かに、ブリュンヒルトが許可を出せば、レオも騎士試合には出れるに違いなかった。

「いや、別に出たいわけじゃあ……」

それでも、レオは改めて冷静になってブリュンヒルトにそう伝えた。それは、余りブリュンヒルトとの仲の特権的に使っていると思われたくはなかったから出た言葉であった。だが、ブリュンヒルトはそんなレオに対して少し真面目な顔をして続けた。

「騎士試合、イーダ殿下もご同席なさるわけでしょう？ 当然、優勝者には殿下の手にキスする権利が与えられるのでしょうか？」

「……まあ、そうだな」

ブリュンヒルトの言葉に、レオはどきり、とした。そして、それが表面にでないように最大限の努力をしなければならなかった。そ

れは、レオが考えないようにしていたことだったのだ。

「去年までは指をくわえてそれを眺めていたわけでしょう？　今年もそれでいいの？」

その言葉にレオは、胸の中にある想いを揺さぶられた。少しの葛藤の後に、レオは、

「……………勘違いするな。俺はただ、自身の研鑽の為に騎士試合に出るだけだからな」

こう云って、騎士試合に出る決意をしたことをブリュンヒルトに語ったのだった。

「ふふっ」

レオの素直ではないその言葉に、ブリュンヒルトは軽く微笑んだ。

第二章 騎士試合 ? (後書き)

うーむ。今、この騎士試合の次の章を執筆しているんですが難しいなー。などと作者のどうでもいい泣き言はともかく、4日ほど見ないうちにお気に入り登録してくれてる方が増えてますね。嬉しい限りです。

第二章 騎士試合？

「レオ、騎士試合に出るの？」

レオがそうイーダに尋ねられたのは、ブリュンヒルトと騎士試合について語ったその翌日の、神学部の講義の終わった後であった。レオは法学部であるが、父にキリシア教についても学ぶように云われていたために、イーダと同じ神学部の講義もいくつか受講していたのだった。

「ん？ ああ……」

いち早くそのことをイーダが耳にしていることに驚きを感じながら、レオは肯定した。

「……どうして？」

イーダの問いに、レオはどう答えればよいのかわからなかった。もちろん、直ぐにブリュンヒルトに焚き付けられた、イーダへのキスの件が思い浮かんだが、そのことを口に出せるほど、レオは素直でも気障でもなかった。

「どうしてって……まあ、自身の修練の一環として……」

「……ふーん」

レオの答えに、イーダは一度そう納得したような表情を無理やり作って見せた。

だが、やがて、意を決したように、少しだけ怯えた表情を見せながらもレオに尋ねた。

「わたし、自惚れてもいいのかしら？」

その言葉はイーダにとって最大級の勇気を動員して発せられたものだった。レオは、その言葉に堂々と答えたかった。そして、イーダの細い体を抱きしめたい欲求が沸き起こった。だが、それでも、理性をかりうじて働かせて、欲求に抗うことができた。レオとイーダの立場からすれば、他にどうすることもできないのであった。

「まあ、取り敢えずこれだけは聞いてくれ」

けれどレオはイーダの問いに直接答えはしなかったが、それでも自分自身の想いはっきりと口にした。

「絶対に勝つ。絶対に優勝する」

その想い、その決意をはっきりと聞いて、イーダは自分が両想いであることを確かめることができた。イーダは怯えた表情を、パツと華やかせて、少しでも頬を林檎色に染めながら、

「うん！ 頑張ってね、レオ」

と云った。

レオの胸に、どろどろとした妄執や、穿ったものとは違う、愛する何かの為という、純潔な闘争心が宿った。

第二章 騎士試合 ? (後書き)

次回更新は日曜日の予定。この土日で一杯書くぞ！
感想をお待ちしています

第二章 騎士試合 ？

「ああ！ 神聖なる騎士試合に異教徒が出場することになるとは…
：聖女様は何をお考えになっておられるのか」

レオとイーダが話している真横に、いつのまにか、あのイラノフが姿を見せていた。イラノフもまた、イーダと同様に既にレオが騎士試合に参戦することを知っているらしかった。

「まったくだ」

「ブジャル候の云うとおりです」

ブジャル候と一緒に居た、二人の学生も、イラノフの言葉にそう追従した。

「なんだ？ 今日取り巻きを連れてるのか」

レオとイーダは二人ともはじめはイラノフを無視しようと思ったが、イラノフが二人の進路を塞ぐように立ちふさがると、いやいやながらもレオはイラノフに云った。それでも別にレオの方から好意的に会話を始める理由はまったくなかった。

「異教徒の分際で神聖なる建国祭の騎士試合に出場しようとはどのような見だ？」

レオの台詞を無視して、整ってはいるが、相変わらず陰湿なものが滲む表情をレオに近づけてそう囁いた。

「なんだ、お前、俺に負けるのが怖いのか？」

平然とレオがそう返すと、イラノフはくっくく、と、人を見下すように笑った。

「何を……貴様、去年の結果を知っていてそう云っているのか？」

「ああ、前年の準優勝はお前だったな、イラノフ」

ルブレシアの建国祭の騎士試合は、団体戦である。出身地ごとに分かれて二組に分かれ戦うのだ。そして、その中で最も優れた騎士を表彰するのである。去年はアンジェイというルブレシアの鍛冶屋の息子がその知略と剣技で優勝していた。イラノフはアンジェイとは逆のチームのリーダーで、五人を倒す武とアンジェイの攻勢に長時間対応して見せ、準優勝という結果に甘んじていた。イラノフとしては準優勝自体に思うことは少なかったが、最後の局面でアンジェイに数合打ち合っただけで敗れたということが一番気に喰わなかった。

「アンジェイとの一騎打ちは中々見ものだったらしいじゃないか？」

レオはイラノフの性格から、イラノフがアンジェイとの一騎打ちの結果に対して粘着しているのを予測していて、わざとそのような口にした。

レオの言葉に、イラノフは口元をピクつかせた。

「前年の優勝者のアンジェイは今、帝国との戦争に出ている。今年は俺が優勝さ」

「まあ、せいぜいそう思っておけ」

レオとイラノフはそのまま睨みあったが、やがてどちらからとなく、歩み始め、互いに背を向けた。

建国祭の、十日前のことであつた。

この翌日、聖女ブリュンヒルトによって、イラノフを東部軍の司令官に、レオを西部軍司令官に任じるという通達が行われたのであつた。出身地別に出場者を分ける騎士試合において、リヴォニアと戦争をすることが多かった東部出身者と、レオが分けられたのはブリュンヒルトの配慮であつた。

☆ ☆ ☆

建国祭の当日は晴天であつた。隣国との戦争は当然、続いては居たが、それでも名君と称される王による統治は良く、人々は祭りに活気を割けるだけの余力を持っていた。

この祭りはルブリン司教を兼任することになった聖女ブリュンヒルトと王の代理として、隣国ハルガリアの王女かつルブレシアの王位継承者であるイーダの挨拶によってつつがなく始まった。それほどろか、美しい女性である二人の挨拶に、ルブリンの男たちは大いに盛り上がった。朝だというのに、そのまま酒に手を出し、騒ぐものさえ居た。

そんなルブリン全体が既に盛り上がり始めている中、郊外に出て真剣な顔をしている集団があった。騎士試合に出場する集団の内、レオが指揮する、リヴォニア人とルブレシア東部の出の者から構成された一団であった。

「それで、レオ殿下、作戦はどんなさるのですか？」

丁寧に、特に裏を感じさせぬ風で、ルブレシア貴族の子弟がレオに問った。恐らくイラノフのような反リヴォニア感情とは無縁なのだろうな、とレオは思った。

「作戦が洩れるから、直前までは伝えぬ、ということでしたが……」

レオがそう云ったのは無理からぬことであった。一般的にはいくらルブレシア西部の貴族や住民はリヴォニアに対して好意的だとは云え、異教徒のレオに指揮されるのを嫌う内通者が出ないとも限らなかったからである。

「作戦を披露する前に、まず全員に問いたい」

レオがことさら真剣な表情をしてそう告げると、ルブレシア人たちは緊張を走らせた。既に作戦を知っているユルギスらリヴォニア人たちだけは、特に緊張した風もなく、レオの話もなあなあに聞いている。

「この騎士試合が終わった後、女性と約束がある者は手を挙げてくれ」

予想もしなかった質問に、ルブレシア人は緊張を解かされた。そしてそれから、この異教の王子は何を云っているのだろう、と顔を見合わせあっている。

「戦いが終わった後の、貴婦人とのひと時、それが君ら”騎士”の楽しみなのだろう？」

レオが”騎士”と殊更に強調して見せたのは、レオがイーダに云ったように、レオの祖国、リヴォニアには騎士と云う概念そのものがないのであった。もともとが騎馬民族を祖とするから、馬に乗るのが特別な階級であるという概念が生まれなくても当然ではあった。

「いいから拳げろ」

レオの声自体に張りがあるのももちろんだが、リヴォニア人であるレオのルブレシア語はしばしばきつい発音に聞こえてしまうことがあった。今回がそれであった。鋭く怒鳴られたようにも感じて、一人が手を拳げると、そこからぽつりぽつりと手が拳がっていき、最終的にはほぼ全員が手を拳げる形になった。

「さて、本題に入ろう」

拳がった多くの手を見て、満足そうにレオはそう云って、一度その話は打ち切り、作戦の概要を述べ始めた。

「今回、我々には軍馬が不足している。理由は簡単だ。陛下が戦場に根こそぎお連れになったからだ」

もともと、森林が多いルブレシアには馬の産地が無く、軍馬不足

はこの国の常態であった。それ故、”騎士階級”に属する者でさえ、馬を持っていないものが多く、そう云った者は徒歩で参戦するのが常であった。それに加えて、ルブレシア中の馬と云う馬は全て、ルブレシア王が帝国との戦争に駆り出していたのだから、騎士試合に回す騎馬がないのはやむを得なかった。

「我がリヴォニアが提供した軍馬も、百騎足らず。イラノフの方にも半分貸さなくてはならないから、我らの騎兵戦力は五十騎だ。残りの百人には徒歩で参戦してもらわなくてはならない。……騎乗する人員は正当な議論の末に決まった。いまさら依存はないな？」

騎馬のうち、十騎は、ルブレシア人よりも馬術に優れているリヴォニア人たちに当てられ、残りは比較的騎馬の扱いに慣れているルブレシア人を四十人ほど選抜したのだった。ルブレシア人からすればリヴォニア人に優先的に騎馬を分配されたように感じるかもしれない配分だったが、リヴォニア人が馬上の人として自分たちより優れているのは自覚していたし、何より騎馬を提供したのはリヴォニア人たちであった。したがって、この場でいまさらそのことについて不満を述べる者は一人もいなかった。

「作戦はシンプルだ」

不満が出ないのを確かめてから、レオは座り込んで地面に右、中央、左の間隔が綺麗になるように、三つ石を置き、その三つの石に向かい合うように少し放して同じように三つ、石を並べた。

「強力な騎兵戦力を右翼に集中させ、敵陣を突破。反転して敵の背後を突くというものだ。敵は生真面目なイラノフのことだ。基本的に忠実に騎兵を両翼の2ヵ所か中央を含めた三ヵ所に集中するに違いない。相手の騎兵が二十五人としてこちらは五十負けはしない。徒

歩の者がいることを考えても、その程度問題にならないぐらいに、騎兵は強い」

そう説明しながら、レオは手前の右にある石を動かして、その正面の石を弾き飛ばした。そしてそのまま勢いよく、奥の方の中央の石の背後にぶつけた。

「ですが……それでは中央と左翼に騎兵が居ません。これらの陣が突破されてしまうのではないのでしょうか？」

先ほど、レオに作戦について尋ねた男がそう云うと、レオはその通りだ、と肯定した。確かに、その課題を克服しなければ、この策は成り立たなかった。

「そこで秘策がある。お前たち、何を持って参戦するつもりだったのだ？」

徒歩で参戦する者たちに向かって、レオが尋ねた。

「剣と盾ですが……」

「ダメだな」

ルブレシア人たちの答えに、ダメだしをするとレオはルブレシア人たちが反感を抱く前に、その理由を論理的に説明した。

「それは森林の多いルブレシアらしい武装だが、平野で戦うのには向かない。槍を持て」

これは、ルブレシア人たちもよく知っている事実ではあった。森

林での戦闘が多いルブレシアでは、長い槍を木々に邪魔され、自由に槍を扱える空間が無い戦場が多く、ルブレシア人たちの主な武器は狭い場所でも扱いやすい剣、もしくは短剣と小型の盾であった。

「確かに、平野で戦うには槍の方が向いていると思うのですが……なにぶん、余り使ったことがないものでして……」

そうルブレシア人の一人が応えるとレオが、事もなげに云った。

「簡単だ。顔を狙って軽く突けばいい。戦う前に、貴婦人との約束があることをしっかりと思い出させてやってからな」

「えっ？」

レオの言葉の意味を、ほとんどのルブレシア人たちが理解し損ねたようだった。それを見て、レオはより詳しく説明した。

「お前たちのほとんどは貴婦人との約束があるのだろうか？ それは向こうも同じ筈だ。となれば、顔に傷が付くのは嫌がるだろうか？」

「なるほど……」

感心したように頷くルブレシア人たちに、レオは軽く自信の黒髪を撫でながら付け加えた。

「まあ、それだけで、徒歩で騎兵に勝てるとは思えないが、耐えるだけでいい。ようは俺の率いる右翼が敵の背後に回るまで持てばいい」

その言葉に、ルブレシア人たちは無言で、だが、強く頷いて見せた。

「勝てると思うか？」

レオは例の、作戦について詳しく尋ねてきた青年を呼び止めて聞いた。青年は、それに笑って答えた。

「あなたが負けることは今日だけでなく、一生ないのではないでしようか」

第二章 騎士試合 ? (後書き)

どうでしょうか。

いえ、日曜日に更新しなかったことは本当に謝罪します。

しかし、前は週2回更新できるなどと思いあがっていたのですが、僕の能力では週一回の更新が精一杯みたいです。

申し訳ないです。

感想等お待ちしております

第二章 騎士試合？

レオとイラノフの軍勢の間に、イーダとブリュンヒルトが立って、騎士試合の開催の挨拶を行っていた。

「本日、王はここにはおりません。諸卿らの勇敢なる王は遠く異国の地で戦っておられます。若い諸兄らはその王の臣に恥じぬよう各自奮戦することを期待します。また、今日、この場に教皇国から聖女ブリュンヒルトさまと、我らが親愛なる友人、リヴォニア大公国のレオ殿下がいらしております。客人たちにルブレスシア人として誇りあり武を見せて差し上げてください」

そのイーダの挨拶に続いて、ブリュンヒルトが軽く挨拶を済ませると、主催者ということになっている教会の方からルールの確認が行われた。そのルールとは、それぞれレオ、イラノフの戦闘不能判定によって勝敗を決定すること、騎乗する者の戦闘不能は落馬、歩兵の戦闘不能は、教会が用意した特殊な魔術を持って、ブリュンヒルトが戦闘不能と判定された者の武器・甲冑に印を付けるというモノであった。

「これを持って、開戦とします」

イーダのこの言葉によって、いよいよ騎士試合が開戦された。

まず、イーダとブリュンヒルトへの礼儀の点から、馬を下りていた者たちが、全員騎乗し、そして次に、レオとイラノフがそれぞれ前へと歩を進めた。まず、舌戦から始まるのが、ルブレスシアの騎士試合の常であった。

「親愛なるレオ殿下」

最初に舌戦お火蓋を切ったのはイラノフの方であった。ブリュンヒルトに拠る拡声魔術が、イラノフが麦の一粒ほども思ってもいない慇懃な言葉を辺りに響かせる。レオも同じように小麦の一粒ほども思ってもいないことを口にしてみせる。

「为什么呢？ 親愛なる友、イラノフ」

「レオ殿下が我らがルブレシアにいらして既に二年。殿下は一度も故郷へ帰られない。ここで重傷でも負えば、あなたの父が故郷に呼び戻してくれるでしょうから、ささやかながらそのお手伝いをさせて頂く」

「おいおい、重傷を負ったらこの後控えている婦人方とのひと時が楽しめないじゃないか、イラノフ」

その時、レオはたまたま、群集の中に、イーダの茶色い髪、可愛らしい侍女が居ることに気付いた。そこでレオは挑発と、顔を狙うという作戦をさらに有効にするためにエルネアの方へとにこやかに手を振って見せた。イラノフが不思議がってそちらの方を見ると、そこには顔を真っ赤にしてレオに手を振り返す、可愛らしい女の子がいたのである。これから戦いに臨む相手に、このような態度を取られれば多少なりとも、腹が立つものではあるが、イラノフには、まだ冷静さが残ってはいた。不機嫌な顔をしつつも、少しも怒りに身を任せるような事はしなかった。

「ところでイラノフ殿は女性との約束がないのかな？ 無理もない。そのお尊顔では……」

それを見て取ったレオはさらに、イラノフを逆上させるように重ねた。この言葉は、イラノフを強く刺激した。というのも、イラノフは間違いない美男子であり、自身もそう思っている。だが、世間では自身よりも、レオの方が、他の様々なこと——例えば大学の成績であるとか、人望だとか、そういったものと同様に容姿もレオの方が良い、と評されることが多いことを知っている為であった。挑発したレオの方は、勉強や武芸に関して、イラノフより優れていると思っていても、容姿に関しては”どうでもいい”というのが本心だったが、この際、ルブレシアの女たちの評価を使って挑発してしまうことにしたのだった。

「貴様っ！ もう許さん、覚悟しろ！」

そう怒鳴りながら頭に血を昇らせて、イラノフは舌戦を切り上げて自陣へと戻っていった。レオはイラノフの背中を少しだけ見やっしてから、イラノフが中央に戻って行ったのとは違い、自軍の右翼へ加わった。舌戦が終わり、総大将の二人が配置についたのを見て、イーダが手を挙げた。すると、空気を震わす、角笛の大きな音が、ルブリンの郊外に響きわたった。

これが、舌戦に続く、決戦の始まりの合図であるのだ。

「これより、突撃を開始する。我々リヴォニア人を中心に紡錘陣形を取るっ、続け！」

ルブレシア人に中央の、ユルギスに左翼の指揮を任せ、レオ自身は右翼の先頭を切って野を駆けた。

「はああああああああああ！」

「ぐあっ」

レオ軍右翼の戦闘に行く軽い甲冑と細い長槍で武装したレオらリヴォニア人が、重い甲冑を装備し、太いランスを構えて、単純な突進を行うイラノフ軍のルブレシア騎士を的確な攻撃で、突き落とし、戦闘不能にした。

そして、レオたちの攻撃から漏れたイラノフのルブレシア騎士たちも、レオたち軽装の騎兵隊の疾風のような攻撃の次に、ルブレシア騎士たちの押しつぶす様な突進によって揉まれ、あっけなくイラノフ軍左翼の騎士はレオ軍の騎兵戦力によって壊滅させられた。もともと、イラノフ軍の左翼の騎士とレオ軍右翼の騎乗戦力は三倍近い量的差というのがある上、十名足らずとは云え、ルブレシア人よりも優れた馬上の人であるリヴォニア人がいるか、いないか、という点で質的差まで存在したのだから当然と云えた。

「敵の歩兵には構うな！ 我々の真の敵は中央だ！ この敵は突破することだけを考えよ！」

ルブレシア騎士の次に現れた歩兵を目にして、レオはそう叫んだ。だが、レオは敵の歩兵部隊が、騎士隊が一瞬で壊滅させられた為に、動揺し、そして恐怖していることを、感じ取っており、右翼部隊で敵の左翼を突破するという戦術の第一段階のクリアに革新を得ていたのだった。

「何をしている！ 早くこちらにも敵陣を突破するのだ！ 早く中央と右翼を突き崩さなければまもなく背後から敵の右翼が襲ってくるのだぞ！」

味方左翼の醜態を、イラノフは遠目で見て、苛立たしげにそう言

い放った。イラノフは既に、突破されつつある左翼と、敵の中央と左翼に騎乗戦力が一切居ないということから、レオの意図が騎乗戦力の突破力による突破と、機動力による挟撃だと気が付いていたのだ。この状況を覆す、もつとの優れた手段は、こちらも敵の中央なり、左翼なりを突破することであるはずだった。そして、騎乗戦力の居ないレオ軍の中央と左翼を突破することは容易である筈だったが、レオが授けた策によって、イラノフ軍の中央と右翼の騎士たちの持つ突撃力は、激減させられていた。

「こいつら、顔を狙って来てやり難い！」

「騎兵が詰まると、後ろの歩兵が動き難い！　こちらは剣なんだ。接近しないことには勝負にならないっ！」

「わかってる！」

歩兵の装備を長槍に変えたことで、騎兵に対してだけでなく、盾と剣で武装するイラノフ軍の歩兵も、リーチの差から動き難くなっていた。接近すれば勝機があるものの、槍袈を前に右往左往する味方騎士が邪魔で、接近し難い状況になってしまっていたのだ。

「この分だと、十分に持ちこたえれそうだな」

「ああ！　やはり実践を経験している人があると全然違うな」

イラノフ軍に較べて、レオ軍の中で行われる会話の声には幾分余裕のようなものがあつた。戦況は、レオ軍が圧倒的優勢であつた。

「余っている歩兵は突破された左翼の兵と合流し、突破した敵の背後に喰らいつけ！」

「それでは中央の背後が手薄になってしまいましたが……」

「右翼から一部兵を呼んで中央の背後を固めさせろ！ 背後に回ってきた敵を挟撃するのだ！」

理論的に、このイラノフの指示はそう悪い物ではなかった。この策が実現していれば、イラノフ指揮する中央を後ろから襲い、味方の中央と挟撃する体勢を構築したレオの右翼は、一方で敵の右翼の残兵と中央からの増員、そして、右翼から中央への増員によって逆に挟撃されることになったであろうからである。

だが、結果的にその試みは失敗した。レオたちリヴォニア人が速過ぎたのだ。まず、右翼の残兵とそれに合流した中央の兵士たちが背後から襲うことができたのはルブレシア歩兵と一部のルブレシアの騎士だけに対してであり、レオたちリヴォニア人と大部分のルブレシア騎士はその時既に、中央の背後に迫っていたのだ。

さら間の悪いことに、イラノフが要請した右翼からの増員も、レオたちが中央の背後を襲うその時に、間に合うことができなかった。結果的に、イラノフの率いる中央は左翼に兵力を回した分だけ手薄になってしまっていたのだ。

「突撃せよ！ イラノフを馬上から突き落とせ！」

この段階に至って、レオは他の命令を発する必要性を感じなかった。レオ自身が先頭を駆け、敵の歩兵にぶつかる。構えられた盾と盾の隙間に長槍の一撃を加える。乱れた敵を馬蹄で押しつけ、横合いから打ち込まれる剣を、槍の柄で受け止めて見せ、さらに前進を続ける。その突撃を受け止められる者は、その場のどこにも居なかった。

レオが突き崩した穴を食い破るようにユルギスたちがさらに突撃する。レオに劣らぬ武をもってリヴォニア人たちは後背のルブレシア人たちの為にレオが作った穴をさらに大きく、ズタズタにするという役割を完璧に遂行して見せた。

さらに、リヴォニア人たちに続く、ルブレシア騎士による突撃を受けて、イラノフ軍の、背後からの攻撃に備えていたルブレシア歩兵は早々にこの突撃を支えきれなくなり、あっさりとレオたちが正面の敵に備えているルブレシア歩兵のところまで到達することを許してしまったのだ。この段階で、イラノフ軍の中央は大混乱に陥ってしまった。

「ちっ」

味方の劣勢を見て舌打ちするイラノフを、さらにイラつかせたのは味方のわかりきった事実の報告だった。

「イラノフ！ このままじゃ不味いぞ！」

イラノフに近しいルブレシア貴族がそう叫ぶと、イラノフは血走った目で静かに答えた。

「わかってる……」

だが、この時、勝利の女神は一度、レオの方へと向けた微笑を僅かに、イラノフの方へと向けなおした。

「異教徒どもがあああああああ！ 舐めるなあああああああ」

そう叫び、髪を振り乱しながら、レオたちにぶつかって行く、一団が現れたのだ。

当初、中央に移動し、レオたちの突撃を阻むはずだった、イラノフ軍の右翼からの増援隊が絶妙なタイミングで戦場に乱入し、味方さえもを押しつけながら、強引にレオたちの右手へぶつかってきたのだ。

「くっ」

盾ごと相手の騎馬に体当たりするという、我をも顧みない攻撃に、さすがのレオたちも、一瞬、馬の足を止めてしまった。

「今だ！ 他に構わず、レオを突き落とせ！」

レオらと増援部隊の激突に僅かな勝機を見出したイラノフはレオ目掛けて乱戦になりつつある戦場へと突入して行った。そして、それに十数名が続いた。

☆ ☆ ☆

「落ちろ！」

そう唸りながらイラノフは乱戦のさなか、レオの場所までたどり着き、ランスで突いた。

「くっ」

別の騎馬を相手にしていたレオにとって、その一撃は不意の物だった。辛うじてかわしたものの、レオは体勢を崩してしまった。ラン

スを突いた勢いのまま、接近してくるイラノフに、レオの持つ長槍は不利であった。長槍は騎兵同士や対歩兵では強力な力を発揮するが、間合いに入られれば、一挙に不利に立たされてしまう武器であった。

だが、レオは既に戦場の人間であった。長槍が使えないと一瞬で判断すると、すばやく長剣を抜いて構えた。

「馬鹿正直な奴だな」

レオがそう云ったのは、イラノフがランスを捨て、レオと同様に長剣を抜いたからだった。

「本来、騎士の一騎打ちにランスなど使わん。国王陛下に捧げた剣で競うのだ。貴様が長剣を使うのなら、俺も長剣を使おう」

異教徒に対しては激情を見せるイラノフだったが、結局はどこまでも模範的なキリシア教徒であった。明らかに有利な武器であるランスを捨て、長剣で真っ向から勝負を挑みに来たのである。

「お前のそういうところは好きなんだけどな」

レオは苦笑しながら云った。レオ、というよりもリヴォニア人は勇士を讃える慣わしが特に強い。レオはこの戦場でこのような振る舞いをするイラノフに敬意を覚えた。

「行くぞ！」

「来い！」

突撃してくるイラノフと、それを受け止めるレオの激しい斬撃の

応酬が始まった。

「はっ！」

「ふっ！」

二本の剣がぶつかり、火花が散る。金属音が響く。そして、ぶつかった衝撃が二人の手に響く。

レオとイラノフの剣術の腕前はややレオが優位に立っている。しかし、それでも何度かに一度はイラノフが勝利し得る程度の実力差に過ぎない。だが、この場での勝敗を分けることになったのは、馬術であった。

馬上で剣を振るう、というのは存外に難しく、また、今回の戦いで二人が長槍とランスを用いたように実戦で使う場面もそうそうない。だが、馬術に優れているレオのほうには、イラノフにはない経験が何度かあったのだ。

「くっ」

イラノフは手に伝わった衝撃を耐えられず、剣を大きく弾かれてしまい、そう唸った。

勝敗を分けたのは乗馬の技量であった。イラノフは片手で手綱を握らなければ身体の平衡を保つことができないため、本来は両の手で扱う長剣を片手で振るっていた。

一方のレオは手綱を握らずに、足を使って自在に馬を操り体の平衡を保ち続けることができた。それゆえに、両手で長剣を振るうこ

とが出来た。

レオの両手から繰り出される斬撃を、イラノフは片手で受けなければならなかった。つまり、上手く受け流すように受けなければ力負けしてしまうということであった。だが、それは元々、僅かとは云え力量が上の相手に対して早々できる芸当ではなかった。

「くそ！」

イラノフは弾かれた剣をすぐさま体の正面で構えなおして次なるレオの一撃に耐えようとした。だが、それは次の一撃をかわすという選択肢を潰したことであった。

「はあああああ！」

ここにいたって、レオはわざわざイラノフの体を狙う必要性を感じなかった。イラノフの手からは既に出血があり、この全力の一撃で、全てを終えることが出来るという核心があったからであった。

レオは、全力を載せた剣をイラノフの長剣にぶつけた。

「ぐああっ」

短い悲鳴と共にイラノフの手から長剣が弾け飛んだ。

「いい勝負だった」

レオがそう云うと、イラノフは忌々しげに、けれども素直に敗北を認めた。

「俺の負けだ」

最後は総大将同士の一騎打ちが行われるほどの激戦だったが、戦闘の結果そのものは、レオ側の圧勝だった。レオたちは百七十人が参戦して戦闘不能判定を受けた者は二十七人であるのに対して、イラノフ側は、最初にレオたち騎兵戦力の猛攻を受けた左翼と中央の損耗が激しく、百六十八名が参戦して、八十一名が戦闘不能判定を受けたのだった。

☆ ☆ ☆

群集が、息を呑んで見守るのは、美しい隣国の王女と美しい隣国の姫であった。騎士試合の勝者であるレオがルブレシアの王位継承者であるイーダの手に口づけをするという、絵画の一場面に相応しい出来事であり、ルブリンの民衆は美しい二人を厳かな気持ちで見守った。

「では、勇士レオ、イーダ王女の前へ」

ブリュンヒルトの言葉に従って、レオはイーダの前へと歩みを進めた。そして、跪いて、イーダの小さな白い手を取った。それはひんやりとしていて、戦いの後にはとても心地良かった。けれど、イーダと目が合うと、レオは思わず赤面してしまい。指先の鼓動がイーダに伝わるほどになってしまった。

イーダの方はというと、レオに手を取られ、顔を赤らめていたが、それを誤魔化すように、拗ねたようにレオに小声で囁いた。

（騎士さまは私の侍女に手をつけられるのですね）

騎士試合の前にエルネアに手を振った一件だった。

（そ、それは……）

レオが何か言い訳をしようとしていると、ブリュンヒルトのさらなる言葉が辺りに響いた。

「今、ここに誓いの口づけを――」

口づけ、という言葉に、レオとイーダが顔の色をさらに赤くした、その時であった。

「注進、注進！」

騎乗したまま、そう叫び、騎士試合の会場に乱入してくる男が居た。

その男はレオたちの横に跪き、ブリュンヒルトや議長の前に向き直った。さすがにこのような中で二人は手を取り合う気にもなれないで、姿勢を正して二人はブリュンヒルトらの反応をうかがった。

「貴様、今、ここで何が行われているのかわかっているのか！ 貴様、名を名乗れ！」

そう怒りの声をあげたのは議長であった。

「私の名はスタニハス。階級は騎士でございます。火急の用である為、また、この場にいる皆知る権利があること故、この場に参上しました」

「たかだか一介の騎士如きがこの伝統ある騎士試合の邪魔を……」

「議長、落ち着いてください。怒るは話を聞いてからでも遅くはないはずです」

いつぞやの審問と同じようにブリュンヒルトが宥めると、議長はひとつ咳払いして訪ねた。

「うむ……それで、何事か？」

その声は落ち着いてはいたが、やはり怒気が含まれていた。だが、スタニハスと名乗った男。まだ若干二十にもなっていないであろう彼は、怯むことなく、けれどどこか無念を抱えたように、事実を述べた。

「国王陛下が……国王陛下が……崩御なされました……」

その騎士の言葉は一瞬でルブリン中へ、そしてルブレシア中へと伝播していった。大きく時代が動こうとしているを、誰もが感じ取っていた。

第二章 騎士試合 ? (後書き)

いよいよ、物語は次の段階に……

ところで、

第三章 内乱？

「それで、殿下。実際のところどうするおつもりですか？」

ルブレシア王の戦死の報に、騎士試合はすぐさま閉会となり、レオやユルギスは戦勝の気分を味わう間もなく、邸宅に戻るとすぐさま政治的話題に入った。

「……どうするつもりというത്？」

「殿下もわかってらっしゃるはずですよ。今、我々がどう動くかは非常に危うい問題であることを」

それは、ルブレシアに今後の動向をめぐる話題であった。というのも、法律上はハルガリア王女イーダがルブレシア女王として即位する筈なのだが、それを心よく思わない人間も多々いるのであった。そして何より、王女イーダを支持する派閥、あるいは先王に忠実であった戦力はハルガリア軍と共に遙か帝国に展開しており、逆に反ハルガリア勢力は帝国への出兵を抑え、ルブレシアに戦力を温存しているのだ。その代表的人物がブジャク候イラノフであり、その動員可能兵力は一万近いだろうと思われた。

「しかし、実際悩ましいところだろう？」

レオーというよりリヴォニアがどう動くかは非常に難しい問題であった。まず、イーダに味方し、その即位に成功させた場合はルブレシアは事実上のハルガリアの属国となってしまう。今までリヴォニアは南西の国境を友好的かつ、比較的弱体なルブレシアと接しているが故に安泰としていたが、ルブレシアを属国とした強大なハ

ルガリア勢力との境界を拡大してしまうことは安全保障上大きな損失になることは疑いなかった。

しかしその一方でここでイーダを見捨ててしまい、イラノフの傀儡の王が即位してしまうと、反リヴォニアのイラノフが聖剣騎士団と同盟してリヴォニアに襲いかかってくる可能性が高く、これまた存亡の危機に関わることであった。

「……ハルガリアと我らはルブレシアと我らほどではないにしろ友誼はある。ルブレシアに置いてイラノフが権力を握るよりはまだルブレシアがハルガリアの属国になったほうがましだ」

「わかりました」

一応の筋が通っているレオの論理にユルギスはそう答えたが、少し悩んだように額に皺をわずかに寄せながら付け加えるように提案した。

「ですが私は、第三の手段もあると思います」

「それは？」

レオが訪ね返すと、ユルギスは迷いを振り切ったのかのように、アーモンド形の綺麗な目に力を入れ、怖気ることなく大胆な提案を行った。

「イラノフとイーダ王女の両方を消して、我々の傀儡の王を即位させるのです。いや傀儡とまで行かなくても構わない。親リヴォニアの王を即位させてルブレシアをリヴォニアの勢力圏にしてしまうのです。はっきり云って、これが最上かと」

現状、ハルガリア軍とルブレシア軍の主力は帝国遠征で遙か東方に展開しており、帝国と睨み合っている都合上、ルブレシアに到達するにはそれなりに時間がかかることが予想される一方で、軍馬の豊富なりヴォニアは二万近くの兵士を即座にルブレシアに送ることが可能であり、この二万という数字はイラノフ軍やイーダ軍よりも遥かに多い数字であった。

「だが、それではその後ハルガリアが黙ってはいないだろう」

レオはユルギスの提案に声を震わせながらそう指摘した。それは、ユルギスの提案に確実に妥当性がある一方で、自分が大切に思っているものを壊さなくてはならない提案であったからである。

「ルブレシアを手に入ればハルガリアとの国力差はだいぶ縮まります。さらに帝国と同盟を結べれば逆にハルガリアを帝国と分割することだって夢ではありません」

「もう云うな、ユルギス」

このレオの言葉に最も驚いたのがレオ自身だったかユルギスだったかはわからない。ただ、理論的に、冷静に行動することに一つの長所を置くレオが議論を主従関係を盾に放棄したという事実にはレオ自身も、そして臣下であるユルギスも驚愕したことは間違いなかった。

「……殿下。お気持ちはわかりますが、殿下は一国の王子です。リヴォニアの利益を――」

「云うな！」

冷静にそう諭そうとするウルギスの追撃からレオはそう云って逃れた。普段からは考えられないほどに感情的な主にウルギスはそれ以上何も云おうとはしなかった。そんなウルギスにレオは命じた。

「ウルギス、お前は今すぐルブレシアを立て父を説得して兵士を集めておけ」

「……わかりました。ですが殿下はどうなさるおつもりで？」

「リヴォニアの軍事干渉について聖女ブリュンヒルトやルブレシア議長、イーダ王女、ハルガリア商館と話をつけておかねばならん。これはお前には荷が重過ぎる」

荷が重過ぎる、というのはウルギスの能力に起因するものではない。と、云うのも外交の場において聖女やイーダ王女、そして大国ハルガリアの貴族等と交渉を行うにはウルギスの地位が低すぎるのだ。どうしてもへりくだって交渉しなくてはなくなる。対等な関係で交渉を行うには王子であるレオ自身が出向かなくてはならないのだ。

「了解しました。それでは直に私はここを立ちましょう」

「……すまん。こんな俺で」

言葉通り、すぐさま出立に支度をしようと背中を向けようとしたウルギスにレオがリヴォニアの国益よりも、自分の感情を優先したことを認め、そう謝った。

「いいえ、殿下。いつもの殿下も悪くはありませんが、そういう目

をなさっている殿下も悪くございませんよ」

「目？」

そう疑問系に言葉を発したレオに答えずにユルギスは退出していった。レオは机の上に放り投げたままの鏡を見つけ、それを手に取り覗き込んだ。

☆ ☆ ☆ ☆

ユルギスがリヴォニアへ立った翌日、レオが訪れたのは、イーダが所有していた邸宅ではなく、ルブリンの中にある白鷺城であった。この城はルブレシアの王家の紋章である白鷺をモチーフとした白い城壁を持つ建築物で、それが赤いレンガの城郭をもつルブリン市全体の風景と、絶妙な調和をなしている。

「イーダ王女に用があって参りました。どうか取り次いでいただけないだろうか？」

レオが衛兵にそう尋ねてから待つとしばらくして茶色の髪をした女の子らしいふくよかな線をしたエルネアが現れた。

エルネアに導かれて、レオは城内に入った。そして、その城の中を歩きながら、エルネアが云った。

「イーダ王女は今、議長閣下とブリュンヒルト様とお話なさっている最中でございます」

「……俺が入ってもいいのか？」

レオがそうエルネアに尋ねると、エルネアはにこやかで柔らかな笑みを浮かべた。

「はい、お三方とも、むしろ歓迎の様子でございました」

そういいながら、ある一室の前で立ち止まり、エルネアは小さな手でドアを叩いた。

「誰かしら？」

ドアを通して、少し曇ったイーダの声がエルネアのノックに答えた。

「エルネアです。レオ様をお連れ致しました」

「どうぞ」

イーダの返事を聞いて、エルネアは扉を開け、レオに一礼した。レオはエルネアに礼を云ってからイーダのいる部屋へと足を踏み入れた。

「よく来たわね、レオ」

待ってたとばかりに第一声でレオを歓迎したのはブリュンヒルトであった。

「殿下、ごきげん麗しく思います」

「来てくれたのね、レオ！」

そして、ブリュンヒルトに続いて議長が、そしてイーダがレオに歓迎の意を示した。

「お三方とも何についてお話なさっているのです？」

レオは手短に挨拶を済ますとさっそく本題に切り込もうとした。時間との戦いは既に始まっているというのがレオの考えであった。

「イーダ殿下の即位について、ね」

ブリュンヒルトもそのことを承知しており、正直にそう語った。

「レオ殿下。率直に申し上げます」

それを受けて、三人を代表して議長がレオに向かってそう云った。

「伺いましょう」

その言葉は短かったが、最も重要な点を正確にレオに伝達した。

「と、いいますと？」

だいたいの事情はレオの方も把握しているが、双方の合意を正確に取るには、この聞き返しは絶対に必要な行為であった。

「キリシア教を信奉する国家では戴冠式に用いる祭具を教皇庁から借り受けなければ実行できないのです」

そこで、齡ゆえか、議長は舌が乾きを感じ、テーブルにおいてあるグラスに手を伸ばし、それに口をつけた。その様子を見て、議長

の話を続きをイーダが引き取った。

「が、問題があるのです」

「と、いうと？」

「私はハルガリア王の娘です。そのような女がルブレシアの玉座に着くのを、皇帝が良しとする筈はありません」

「皇帝が、妨害工作を行うと？ 教会に対して？ そのようなことをすれば、キリシア教の守護者としての帝国に傷が入るだけではないのですか？」

「まあ、あの皇帝のことだから、バレなければ問題ない、とか思っているでしょうね」

ブリュンヒルトの皇帝のことを思い浮かべながらのその言葉に、イーダは頷きながら話を続けた。

「と、云うわけで、帝国の勢力圏を迂回しないといけないから教皇庁に出した使いが戻るまで1月近くはかかると思うわ」

「なるほど」

このことは完全に予想外であった。レオはルブレシアと教皇領の距離から、イーダの戴冠まで精々が十四、五日と見ていたからである。

「そして、次の問題。その間、ルブレシアの玉座は空白になってし

まうの。もし、その間にイーダ殿下の身に何かあれば……」

「つまり、イーダ王女が正式に即位するまでの間に王女を害して自ら王位に就こうとするものがあるということだな？」

遂にレオは、核心を突いた。それぞれの立場から不用意に誰が、という風に名前こそださなかったが、この場にいる全員が、イラノフの顔を思い浮かべた。

「はい、殿下。それでぜひともリヴォニアの力をお借りしたいと」

再び、水を飲み終えた議長が、力強く、縋るようにレオにそう訴えた。議長の家柄は当然、その地位に相応しい名門ではあるが、既に名声と所有する力がつりあわなくなっており、独自の軍事力を所有していない。議長はジグスムント王の強力な後ろ盾が在った為に政治力を発揮することができたのだが、ジグスムント王に近かったが故にイラノフとは不仲であった。イラノフがルブレシア王に即位した場合、彼の命運は少なくとも政治上においては、確実に終わることになるだろう。

「ハルガリアの了承は取っているのですか？」

これはレオが最も気にしていたことであった。もしこの干渉でリヴォニアが大国であるハルガリアの不興を買うようなことがあってはならないのであった。

「お父様は私が必ず説得いたします」

イーダのその言葉は誠実そのものであったが、担保となるものは何一つない。一国の将来を背負うものとして、レオは本来、ここで

もう一考するべきである。

「わかりました。それでは私は直にここを立ち、援軍を連れて参ります」

だが、レオはそれをせず、イーダの何の保証もない言葉を信じてしまった。その事実が気付いたとき、ユルギスが云ったように、自分が変わりつつあるのではないかという認識が生まれた。

そして、そんな自分に苦笑しながらレオはイーダに向かって微笑みかけた。

「必ず援軍を連れて直に戻ってくる。それまで無事でいてくれ」

「うん……待ってる」

いつもは勝気な空色の瞳が、この時は甘えるように、穏やかであったのがレオにとって印象的であった。

☆ ☆ ☆

「そうだ、エルネア」

三人がいる部屋から退出したレオは、見送りに出てきたエルネアに話しかけた。

「なんでございましょうか、レオ殿下」

異国の王子が自分の名を覚えているということに、エルネアは驚いたが、なんとか事務的な返答をすることに成功した。

「ひとつ頼まれてくれないか？」

黒髪黒眼の、異教の王子のこの申し出に、エルネアはすぐさま答えた。

「何なりとお申し付けくださいませ」

そのまっすぐで迷いのない返答に、逆にレオは云いにくそうに切り出した。

「お前の主が嫌いそうなことなのだが」

その言葉を聞いて、エルネアは一瞬迷いを見せたが、直ちに腹を決めたように表情を引き締め、レオに向かって断言した。

「例えそうでも、レオ殿下がイーダ殿下の負になることを命令なさるはありますが。イーダ殿下が嫌いなことであっても、殿下の為になるのなら、私は喜んでなんでもいたします」

騎士試合で、自分が手を振っただけで顔を赤くしていた少女と同じ人物とは思えない、きっぱりとしたその物言いに、レオはエルネアのイーダに対する忠誠心が本物であることを知った。

「君の気持ちはわかった」

そう前置きして、レオはエルネアに一つだけ、保険の為の策を授けた。

「あとでブリュンヒルトにも伝えて欲しいのだが……」

そして、この後直に、レオはルブリンを立ち、リヴォニアへと向かった。

この翌日、ブジャル候イラノフは王位を主張し挙兵。徐々に反ハルガリア派の貴族がこれに加わり九千余の兵力を抱える一大勢力となったのだった。

第三章 内乱 ? (後書き)

さてさて、いよいよ内乱編に突入！ 来週は更新できますが、再来週はちょっと課題が修羅場なので更新できないかもしれません……

第三章 内乱？

レオがルブレシアとリヴォニアの国境の都市、フロドにたどり着いたのはルブリンを出て二日後の夕方のことであった。ユルギスが以前からルブレシア⇨リヴォニア間の連絡を密するために編み出した、あらかじめ何箇所かで馬を配置しておき、それを乗り継ぐという方法を用い一日に百km以上走破するという恐るべき速さでの国境の越境を可能にしたのであった。

「殿下、陛下がお待ちです」

「父上がもうこちらに來ているのか？」

「はい」

既にレオの父であるリヴォニア王も既にこのフロドに到着していた。これもまた、ユルギスが手配した連絡網により、ルブリンにルブレシア王ジグスムントの死が伝えられて三日後には、ルブレシアでの政変の予感を告げるユルギスの手紙と共に伝えられていた。そしてそのまま強行軍で一日でここフロドまでやって來たのである

「さすが父上行動が早いな」

「はい、ゼリグ王は戦慣れしておいんです。ここまで早い出兵準備の手腕は今では亡きジグスムントやハルガリアのヤノーシェ王にもできないでしょう」

「俺の兵はどうなっている？」

「殿下の兵は軽騎兵の四千を輜重無しで先行させており、三日後にはこのフロドに到着するかと」

「見事だ。この戦いに必要なのは何より早さだからな」

戦いは早さである。これはレオの一つの哲学とも云える考えであり、それはユルギスもよく承知していた。それ故に、ユルギスは可能な限り兵力をフロドに送る為に全力を尽くしたのであった。

フロドの城の謁見の間の、普段は城主が座る玉座にルブレシア王であるゼリク王が座していた。レオの父親であるこの王は、アメルハウザーの二mを越す体躯には及ばないまでもかなりの巨漢であり、戦場を駆けることも多いことから皮膚も浅黒く焼けており、身だしなみに特に気を使った風も無く、豪快に髭を伸ばし、癖のついた髪の毛もさほど気を使っているようには思えない。かといって汚らしいわけでもなく、どこか気品の混じった覇気を発している王者であった。ある時、配下の者が貴公子然とした息子であるレオの外見を讃えると、ゼリクは

「俺の若い頃にそっくりだ」

などと云って周囲のものを反応に困らせたことがあったが、これは冗談であり、実際には、レオはゼリクと同様に髪が黒い以外は線の細い美しい女性だった母親に似ていた。

「レオよ、久しぶりだな。よくぞ帰った」

久しぶりに見る息子を見て、ゼリクは父親として心の底からにこやかな顔を浮かべた。レオもこの父親のことが好きであり、穏やか

な表情を浮かべて答えた。

「父上も元氣そうでなりよりです」

「うむ。レオとは久しぶりに父子で語らいたいが、そうも云っていただけなくなった」

だが、このような言葉と共にゼリグが王としての顔を見せると、レオもそれに習って王子の顔付きになった。

「ブジャル候が乱を起こしたのですね？」

レオが尋ねると、ゼリブは頷いてから答えた。

「先ほどお前がルブレシアに残していた間諜が放った伝書鳩が届いた。ブジャル候が挙兵したようだな。して、ルブレシアに長く居たお前はこの状況をどうみる？」

「偉大なる王ジグスメントが反リヴォニア勢力を抑えていたからこそ、彼らは我々と友誼を結べたのです。その後継者であるイーダ王女を支持しなくてはわが国の西の国境に新たな脅威が生まれてしまうでしょう」

「ふむ……本当に王女イーダを助けるのが良いのか？ ハルガリア王の野心は留まることを知らぬ。ルブレシアを掌握し、帝国を破った後には我がリヴォニアを脅かすかもしれぬ」

レオ自身、その事はよくわかっていたが、だがレオの中にイーダを見捨てるという選択肢はなかった。だが、それを公の場で言うこともできず、あらかじめ考えていた言い訳をそらந்தた。

「ハルガリア王の野心が留まることのないのは事実。ですが、彼はその能力故に夢を見すぎている嫌いがあるように思えます。実際にルブレシア王国とその偉大なジグスムント王を味方にしても遂に帝国に勝利し得なかったではありませんか」

云ってから、レオは自分がいつもより早口で、言い訳がましい口調で先の言葉を述べてしまったのではないかと云う不安に駆られた。それは事実、そうであったし、ゼリグもそれに気がついてしたが、その場で直に指摘することはせずに話をつづけた。

「確かに、俺とてハルガリアが帝国に勝てるなどと思ってはおらん。ハインリヒ帝も神君とでも云うべき傑物であるしな」

「ならば！」

云ってから、今の言葉には余りにも感情を込めすぎたと今度はレオ自身はつきりとわかった。横目で辺りをうかがうと、謁見の間にいる他の者たちもいつものレオと様子がおかしいことに気がついて、いるようで腑に落ちないような顔を並べていた。

「だがな、わざわざルブレシアをハルガリアにくれてやる必要があるのか、ということだ。ルブレシアという果実が熟れて腐るまでにハルガリアの収穫が間に合わぬのであれば、我がリヴォニアが、ハルガリアの為ではなく、リヴォニアの為に収穫してしまっても構わぬとは考えなかったのか？」

「っ」

その考えはユルギスが前にレオに述べた構想とまったく同じであ

った。レオはユルギスがゼリグに進言したのかと思い、思わずユルギスの方を睨みつけてしまった。

「うん？ ああ、なるほど。確かにユルギスが考えそうなことではあるが、ユルギスはお前と同じ進言を俺にしたぞ？ 別にユルギスが俺に入れ知恵したわけではない」

「……………」

自分の信頼する部下を疑ったことを恥じる一方でレオはもはや父親に抗弁できるだけの論理を自分が持ち合わせていないことを悟り、沈黙することしかできなかった。

「ふむ……」

そんな息子の様子を見てゼリグは側近に目をやり、人払いをさせた。ユルギスはもちろんのこと、そのほかの重臣たちもその場を後にする。

☆☆☆☆

辺りに自分とレオ以外の人間がいないことを確認してゼリグは云った。

「お前、ハルガリアの王女に惚れているそうだな」

「なっ！」

二人きりにしたことから、何かしら内密な話するのだろうとレオ

も考えていたが、この問いは予想していなかった。

「ちなみにこれはユルギスから聞いた」

あいつめ、と思いつつも、ユルギスの立場上やむを得ないことをレオは知っており、例え心の中であっても栗色の髪をした腹心を責めることはできなかった。そして何よりもこれから続くであろう父の言葉の方がずっと重要であった。この時、珍しくレオは怯えていたといっても良いだろう。

だが、父王が口にしたのは、予想以上にレオにとって都合の良い言葉であった。

「別に誰に惚れようと構わんよ。ハルガリア側は困るかも知れぬがな、我がリヴォニアは異教だろうがなんであろが気にせぬという考えが主流であるし、大公国といっても部族間の寄せ集め。部族ごとに掟はあっても別に他国の王族との婚約を禁止する大公国の法があるわけでもないからな」

この時のゼリグは実に父親らしい柔らかな口調であった。レオは父の言葉に緊張を解き、喜びをその端麗な顔に浮かべようとした。だが、その直前、ゼリグは一転して語気を強め強い口調で云った。

「だがな、俺が気に食わぬのは、その為にお前は大公国全体を戦争に巻き込もうとした！ ルブreshiaを切り取るためならば、子々孫々の為という理由がつけられよう。だが、お前は自分の惚れた女の為に大公国全体を巻き込もうとした！ それが気に食わぬとおるのだ！」

「……！」

ゼリグのそれはまったくの正論であり、レオもそのことは重々承知していた。

「俺はルブレシアを切り取るつもりだ」

ゼリグは息子にそう断言した。レオはその言葉にどうしようもない気持ちを抱いたが、続くゼリグの言葉によって僅かな希望を持つことができた。

「惚れた女を守りたいならば、俺がルブリンに着くまでにけりをつけてみせろ。大公国の兵は一兵も渡さぬ。お前の兵だけで、俺が動くより先に決着をつけろ」

そう云ったきり、その場を去る自分の父親の背が、レオにはいつもよりも大きく写っていた。

全ては、レオ自身の手腕にかかっているであつた。

☆ ☆ ☆ ☆

「ユルギス！」

父王の背中を見送ってから謁見の間から去ったレオは、出て直の廊下にユルギスの姿を見つけた。

「はっ！」

答えるウルギスに、レオは命令した。

「俺の名前でこの辺りにある宝石をあるだけ手に入れろ！ 多少借金をして構わぬ」

「宝石、ですか？」

不思議そうに訊き返すウルギスにレオは続けて云った。

「ああ、そして、その宝石を持ってルブレシアの領主の買収工作をしてこい」

買収工作に用いるのを宝石にするのは、金貨では重く持ち運びに不便であるからである。

「買収……領土の通行許可ですか？」

ウルギスがそう答えたのは、全てのイーダ派の諸侯が必ずしもリヴォニアのルブレシアへの介入を快く思っているとも思えず、事前にルブリンまでの道中を抑える必要を感じていたからであった。

「ああ。それと四千騎分の食事を各街で一食分ずつ準備させ、宿営地も何箇所かで立てさせろ。どこに立てさせるかはお前の裁量に任せる」

輜重なしで進軍できる日数は限られている。村や街などから徴収しても良いが、突如として四千食を用意せよと云われても、それができない場合が多いし、正当な代償を払わなければ住民が隠し、抵抗することもしばしばある。友好なりヴォニアとルブレシアの関係を崩さない為に、事前の工作は絶対に必要であった。また、レオの

私財を投じたこの案では、調理する時間や宿営の時間を大きく節約でき、より迅速な進軍が可能になるのであった。

「なるほど……買収する街を結ぶルートは最短距離で良いのですか？」

ユルギスが尋ねると、レオはこれにかぶりを振った。

「……父はイーダを見捨てるつもりだ。イーダと合流し防衛に参加しても援軍は来ない。それならばいつそのこと奴らの裏を斯いて、一挙にイラノフを討つ」

四千にイーダ軍の兵士を合わせれば十分にイラノフ軍からルブリンを守りきれる兵力ではあったが、二万の住民がいるルブリンを包囲されては兵糧が直に底をつくことが明らかであった。さらなる援軍が来れば、イラノフ軍を撤退させることができるかもしれないが、その援軍が今回は見込めないのである。

「わかりました。では、そのように」

ユルギスはそれだけでレオの考えを見抜き、そう答えた。そして早速宝石の確保に向かったのであった。

一人残されたレオは、急激に疲労を感じ始めた。ルブリンを出てからひたすら馬を乗り継いだのだから、これは当然ではあった。レオも三日後には軽騎兵と共にフロドから出陣しなくてはならない。レオの今すべき事は穏やかな睡眠をとることであった。

第三章 内乱 ? (後書き)

更新遅れてまして申し訳ありません。

とりあえずボチボチリアルルの修羅場が改善されており、来週からは週一更新できそうです。

ちなみにルブレシア戦記が完結した場合、この話は改稿、人物再編などを行い、投稿するために該当部分をダイジェスト化し、続編、キリシア大陸物語 チューリピア戦記を始める予定です。

第三章 内乱？

ルブレシアの王都、ルブリンをブジヤル候イラノフが包囲したのは、挙兵から十日後のことであった。これだけの時間がかかったのは、ブジヤル候領がルブリンよりも百kmも南に位置する上、同盟を組んだ貴族たちの兵を待つのに時間がかかった為であった。イラノフ自身の挙兵とその後の行動は迅速であったが、彼の味方の行動が想像よりもずっと遅かったのである。

「我々には時間がない」

重々しく、イラノフは自分に味方した貴族たちを集めて言った。

「タイムリミットは帝国からハルガリア派の軍勢が引き返してくるまで……と云いたいところだが、リヴォニアから援軍が到着するとすれば明後日の夜ぐらいには来てもおかしくないだろう」

イラノフは内心で挙兵に手間取った諸侯に対してイラだっていたが、差し当たっては彼らの力が必要なのでこの場でそのことに触れることはしなかった。その変わり強い口調で次のように断言した。

「今日、明日で必ずルブリンを陥落させる」

その言葉はイラノフ派の諸侯を大きく動揺させた。難攻不落、というわけではないがルブリンは城壁に囲まれた城塞都市である。街全体を覆う外城壁と城を中心とした辺りに内城壁を持つ、それなりに立派な防備を有しているのである。それを僅か二日で落すというのだから当然であった。

「しかし、たった二日で落せるものだろうか？」

「確かに、攻城戦では攻撃側の兵力が四倍は必要だと云われている。敵の兵力を二千強だとすると、我々の持つ戦力にはそれほど余裕は無い様に思われるが……」

諸侯が口々に不安を口にするのをイラノフは遮り云った。

「問題ない。確かに、戦力比で見れば五分五分の戦いだ。だが、もともと王都の城壁は一万近くの大軍で守るために築かれたもの。その広く長い城壁全てを2千の兵力で防御するのは困難だろう」

イラノフは顔と口調、両方に意図的に自信を表した。そうしなければ、諸侯の不安を取り除けないと思ったからである。実際、イラノフには必ず勝てるという勝算があるわけではなかった。というのも、イーダが外城壁と内城壁の間に居住する民が戦いに巻き込まれるのを承知で比較的少数でも十分守ることが可能な内城壁に立てこもればイラノフに勝ち目はないと云えた。だが、イラノフは恐らくイーダが民を巻き込むような布陣をわざわざ行わないだろうと考え、外城壁に展開するイーダ軍を駆逐し、その勢いで内城壁まで突破するという作戦を行わなければならないだろうと考えていた。イラノフが考えていた勝率は五分五分というところだった。

「それで、だ。今日の内にこの策でルブリンを落そうと思うのだが……」

イラノフが策について説明すると、イラノフ派の貴族たちは皆感嘆したようであった。

「見事な策です」

「昨夜のアレはそういう事だったのですね」

「必ずや、今夜中に王都は我らの手中に納まることでしょう」

貴族たちはイラノフの作戦に納得し、それぞれ持ち場に向かっていった。能力的にはやや信頼が置けないが、イラノフに忠実であることだけは彼らの良い点だと、イラノフは思った。

☆ ☆ ☆

「城壁を守れ！ 敵に登らせるな」

イーダ軍の兵士が金属の甲冑の音を響かせながら叫ぶ。そして、圧倒的多数のイラノフ軍を前に怯むこともなく、登ってくる敵軍を迎え撃つ。

「破城槌が来るぞ！ 油をかけろ！」

城壁の下にイラノフ軍の木造の三角屋根を持つ車が迫るのを見て、一人の騎士が部下にそう命じた。彼は、ルブリンの騎士試合においてジグスムント王の死を伝えた若き騎士、スタニハスであった。

スタニハスの命令で、彼らの部下たちは油を壺ごと破城槌にかけた。破城槌の表面には燃えるのを避ける為に湿らせた布なのが貼り付けてあるのが常だが、油を的確にかけられてはそれも効果が薄く、破城槌の中にいた兵士たちは蒸され、慌てて外へと退避する。だが、その背は城壁から降り注ぐ矢に対してあまりに無防備であり、次々に射殺されていった。

ルブレシア人が同じルブレシア人相手に殺し合うという不毛な事実を忘れたように、イーダ軍とイラノフ軍は激しくぶつかりあった。

「死ね！」

独創性のない掛け声と共にイーダ軍の兵士が城壁を登るイラノフ軍の兵士に熱湯を浴びせる。熱湯を顔に被った兵士は手を離し、地に落下し、そのときに頸椎を故障し、立ち上がることもできなくなった。その兵士を、邪魔だといわんばかりに同じイラノフ軍の兵士が踏み台に城壁に上りにかかる。だが、その兵士も

「くたばれ反逆者！」

という叫びと共に飛来した矢によって眉間を貫かれて絶命する。

「ハルガリアの狗が！」

すると別のイラノフ軍の兵士が城壁の下から味方を葬っ弓兵のほうへ矢を射るが、イーダ軍の兵士はすぐさましゃがんで身を隠してしまった。状況は、攻城戦は防御側有利という常識の通りに推移していた。

「敵の攻撃は南門に集中しております」

直属のハルガリア人隊長からイーダは報告を受けていた。さすがに直接城壁に立つことはしないが、本人の気質故か、銀色の甲冑を身に纏い、自室で安穩としているつもりはないようで、城の間を作戦室とし、そこで防衛の指示を行っていた。その光景はハルガリ

ア人には見慣れたものであったが、ルブレシア人たちにはイーダの
そのか細い身体のどこに甲冑を着る力があるのかと不思議がる一方
で、男だてらに戦争を指揮するイーダに頼もしさを覚え始めていた。

「リヴォニアから援軍が来るにしても北から、帝国から援軍が来る
にしても西からですから。南に布陣するのは当然でしょうな」

イーダにそう付け加えたのは、ルブレシア議長であった。彼はも
はや甲冑をつけるような年齢でも立場でもなく、礼服のままである。

「しかし、ただ力攻めするだけとは……イラノフも意外と芸のない
ことをする」

呆れたような声を出したのは、ルブレシアの中年の騎士だった。

イーダはそれに答えた。

「リヴォニアの援軍が来る前にこのルブリンを落そうというのはです
から、それは必死になるのではないかしら？」

イーダがそう返答するとルブレシア議長がどこかひっかかる用に
呟いた。

「だが、ごり押しだけでこのルブリンが落せるとは思えんが……」

ルブリンは別段、難攻不落を謳われるほどの城壁の高さを誇るわ
けでもなく、天然の要害に所在しているわけではないが、一国の王
都だけあって並みの都市よりは堅牢な城壁を持っている。現状の兵
力差ではルブリンの城壁全体を守るにはやや不足ではあるが、それ
でも籠城戦の定石である一対四という数字からみた兵力比的には決
して守りきれない数字ではなかった。にも関わらず、イラノフは力

攻めに終止している。そこに議長はひっかかるものを感じたのであった。そして、それはイーダも同様に感じていたのであった。だが、結局のところ籠城戦とは守る側が受身になりやすい傾向がある戦いであり、現状、レオが援軍を連れてくるまで、イーダたちに行えることは少なかったのである。

第三章 内乱 ? (後書き)

ちょっと短めですが、ぼちぼちキリのいいところまで書けたので投稿。

昨日、鷺塚教授の華麗なる講義録を読んだのですが、凄いですね、あの作品。

それに較べて、かなりこの作品は王道に寄っている気がします。王道は王道で需要があるとは思いますが……ああいう発想力はとても羨ましいです。

第三章 内乱？

「大変です！ 敵がいつせいに松明に点火しました！ どうやら再び総攻撃を加えるようです！」

イーダがその報告を聞いたのはルブリンの籠城戦が始まったその日の深夜のことであった。定石どおり夕刻には兵を退いたイラノフであったが、彼に時間がないことはイーダも承知しており、十分に想定できたことであった。

「迎撃させてください！ 私もすぐに出ます」

冷静にイーダは寝室の扉の向こうにいる部下にそう命じ、戦時ゆえに纏っていた簡素な着物の上にそのまま甲冑を纏うと、司令室として機能している部屋へと向かった。

☆ ☆ ☆

「それで、状況は？」

イーダがそう問うと、騎士の一人が答えた。

「はい、敵が南門に夜襲をしかけてきたようです。これに対処するため、他の城壁から兵を割いて迎撃に当たらせています」

休息させなくてはならない兵士がいる以上、日の昇っている間、ほとんど戦いをせずに済んだ兵を当てるのは当然のことではあった。しかし、イーダは自分がはじめ最初に受けた報告について違和感を覚えていた。

「……ひとつ聞きたいのだけれど」

「はい、殿下。なんでありましょうか」

「夜襲と松明の火がついたのはどちらが先でありましょうか？」

不意打ちに夜襲を行うのであれば、松明などつけずに近づけばよかったのである。敵に気づかれてから松明をつければよかったはずである。それをわざわざ誇示するかのように松明を持って城壁に押し寄せてくるなど……

「松明を点けてからだったと思いますが」

「少し気になります。私も南門に出ます」

そう云って、南門に向かったイーダは、その光景を見た瞬間にあることに気がついた。イラノフの本陣があつた辺りにも輝く無数の明かりは、明らかにかがり火だけでは足りず、兵士が松明を持っていることを示していた。

「……陽動です！」

だが、それを見て、イーダは別の判断を下した。

「は？」

「もしも仮に、あれがイラノフの本陣ならば動いていない……けれど、動いていないのならば、なぜ松明をつけるのですか。松明に染込む油とて無限ではありませんし、その熱は体力を奪います。動く

そのときに松明をつければよいはずです。ならば、あそこにはイラノフ本陣の動くべき敵兵は居らず、あるのは松明のみ」

疑問を抱いた騎士に、イーダは手短に、かつ焦りを交えながら説明した。そして、イーダの説明は騎士を納得させるのに十分であった。騎士は慌てて、イーダに次のように尋ねた。

「そ、それでは敵の本陣は」

このとき、イラノフ軍の本陣の二千の兵力は、東門から少しはなれた林で待機していた。事実として、イラノフの本営に設置された灯りはそこに二千の兵がいるように見せる為に配置された灯りしかなかったのである。

騎士の間に直接答えることはしなかったが、イーダは直さま建設的な命令を下した。

「これは陽動よ！ 直に南門に回した兵士を元の配置に戻してください！」

「は……はっ！」

騎士は慌てて、命令を伝えるに向かった。イーダはその背中を見送りながら、既に遅かったのではないか、という思いが沸くと同時に、それが汗となって白い頬を伝った。

☆ ☆ ☆

イーダが事の真実に気が付くその僅か前、およそ三十人の男たちが、東門の城壁を密かによじ登っていた。彼らの肌も衣服も黒く汚れていた。

イラノフが昨夜のうちに選抜した、夜目の聞く男たちである。彼らの肌と衣服が黒いのはイラノフが調理の為に炭を塗るように命じたからであった。これは彼らだけではなく、彼らの背後で待機しているおよそ二千の別働隊も同様であった。

イラノフが攻撃を開始したタイミングは、月が雲に隠れたその瞬間であった。それ故、イーダ軍の兵士は静かに城壁を登ってくる男たちに気が付かなかった。

城壁を登り終えた男たちは、次に密かに今度は城門を目指した。

「警備兵が居るぞ……」

城門の開閉小屋に四人の兵士がいるのを見て、非常に小さな声で、男の中の一人が仲間に警告した。すると何人かの男が荷から通常の兵装を取りだし、身に纏い、汚れた顔を布で拭った。そして縄を手にし、堂々と小屋の中へと入って行った。

「うん？ どうしたんだ、お前ら？」

もともとイラノフ軍の兵装も同じルブレシア軍の兵士である兵装だけでは敵味方の違いなどつくわけもなく、穏やかにイーダ軍の兵士は尋ねた。

イーダ軍の兵士がそう声を掛けると男たちはゆっくり近づいてから一斉に縄をイーダ軍の兵士たちの首にかけた。

「……………！」

首を絞められては、もちろん悲鳴などあげようもなく、それ故に助けなど来ようもなかった。だがそれでもイーダ軍の兵士は必死に抵抗しようと、近くにおいてある剣や食器に手を伸ばそうとした。

だが、その時既に、残りの男たちが武器を手小屋に入ってきていた。男たちは首を絞められて、悲鳴をあげることができないイーダ軍の兵士たちを容赦なく斬り、絶命させた。こうして、ルブリンの東門は文字通り音もなく制圧されたのである。

「おい、城門が開いていくぞ！」

「どういことだ？　おい、お前ら！　城門の様子を見に行け！」

イーダ軍の兵士たちは異変に気が付きつつあったが、もはや手遅れであった。

☆ ☆ ☆ ☆

「合図です」

隣にいる騎士がイラノフにそう告げた。東門の内側から上げられた、三筋の火矢を見て、イラノフは作戦の成功を悟りながら、騎士に頷いた。

そして、大きな声で命じた。

「かかれ！」

二千という、ほとんどイーダ軍の全体と同数の兵力が、一挙に開かれた東門を突破せんと、甲冑の音を響かせ我先にと雪崩込んだ。

第三章 内乱 ? (後書き)

さてさて、次の話では登場人物が一人増える……というか、以前登場した人物をキャラ立ちさせることにしました。

覚えている方はいないと思いますが、レオとイーダをブリュンヒルトの元へと導いた、白装束の女性です。

どうも書いてるうちに楽しくなってきたので、1巻完結にしようと思っていましたが、ルブレシア戦記をもっと長く続けたいと考えるようになったので。

そういえば、しばらく書いていなかったなので、ここで改めまして――

感想等お待ちしております (迫真)

第三章 内乱？

「敵襲だ！ 城門を早く閉めろ！」

この時になると、敵の姿はほとんど見えないが、轟く軍靴の音によって、イーダ軍の兵士たちは自分たちが置かれた状況に完璧に気がついた。

だが、彼らは二千人の濁流に飲み込まれ、碌な抵抗も出来ぬまま駆逐されていく。

「内城壁に引き上げるぞ！」

イーダ軍の兵士たち外城壁の防御を諦めそのような声が叫ぶようにこだましていた。内城壁とは美しい白い壁をもつ、ルブレシア王の玉座のある、白鷺城のことである。そこは、外城壁よりも城壁の長さは短く、また高さもある。それ故に、防御により適している筈であった。

「このまま内城壁に雪崩込め！」

だが、逆にイラノフはそれに潰け込んだ命令を発する。イラノフとしては今日、もしくは明日、明後日のうちにこのルブリンを攻略しなければならぬのである。白鷺城に立てこもられることだけは避けなければならなかった。

一方のイーダは、東門が突破されたことを悟り、もはや民の為に外城壁で防衛するという考えは捨て、兵士たちに白鷺城まで撤退するように命令を下していた。

「急ぎ内城壁へ撤退してください！」

内城壁の中に次々に味方が撤退し、押し寄せてくる雑踏の中、イーダに一つの報告がもたらされた。

「内城壁の東門には既に敵が迫っており、このまま門を開け放しておけば内城壁にも進入されてしまいます」

一方で別の兵士が横からすがるように云った。

「待ってくれ！ 東門の兵士はまだ全員内城壁に撤退できたわけじゃないんだ！」

「――っ」

一瞬イーダをそれに対してどのような指示を出せばよいのか迷ってしまった。防衛戦の為には遅れて撤退してくる兵士を切り捨てるのが最善である。しかし、ルブレシア人の兵士を見捨てるようなことがあってはルブレシア人に、イーダがハルガリア人であることを思い起こさせてしまう可能性があった。

「殿下！ お気持ちはわかりますが、そもそもこの事態を招いたのは民を巻き込まぬように、などという甘い考えから外城壁に展開した故の結果なのですぞ！」

そう告げたのは、ハルガリア人の隊長の一人だった。外城壁の巨大さに較べて、それを覆う兵力の少なさが、今回の東門突破を招いたのは間違いない、彼の主張は余りにも正しく、イーダは反論に詰まった。そして、僅かな、しかし、重苦しい逡巡の中で、彼女自身の信念からはかけ離れた命令を下そうと、その口を開いた。

「撤退が遅れる部隊は……」

「殿下！」

だが、そんなイーダを阻むかのように、騎士が一人、イーダの前に現われた。イーダは、そこで、自分が恐ろしい命令を下そうとしていたことに気が付き、その騎士へと返答をするまでに僅かな間があった。

「……今度はどうしたのですか？」

自分が、汚い命令を下さずに済んだ安堵を感じながら、イーダは騎士に問いかけた。騎士は、イーダにこう答えた。

「市民が……ルブリン市民がイラノフ軍を攻撃しています！ イラノフ軍の進撃は止まり、遅れていた部隊も着々と城内に駆け込んでおります！」

☆ ☆ ☆

「何？ 市民が我々を攻撃しているだど？」

イラノフは、部下の報告に驚きを禁じえず、細く鋭い目を見開いた。

「馬鹿な。我々は同じルブレシア人だぞ？ 市民が攻撃するべきなのはハルガリア人のイーダの方だろう」

恐らく、この辺りの感性が、有能と云っていいイラノフが遂にルブレシア人の人望を獲得できなかった原因に違いなかった。イラノフにこの報告を行った部下は、その点に薄々感づいていたが、イラノフの不興を買うことは避け、続けて指示を貰おうとした。

だが、彼が口を開いたその瞬間、どこからか飛来した壺が、彼の頭蓋に直撃した。

「ぐあ……」

主の前ということと、戦線からいくらか離れていた故に、兜を脱いでいたことが、彼の生死の分かれ目となった。イラノフの部下は倒れ、その身体を僅かに痙攣させた後、キリシアの神もとへと召されたのである。

「なぜだ……」

イラノフは慌てて兜を被りながら、そう疑問に思った。彼が疑問に思っている間にも、二階から、屋根から、路地裏から、イラノフ軍に対してものが投げつけられ、お湯が掛けられ、油と火を浴びせられる。直にでも指示を出さなくてはならない状況だったが、イラノフは余りに釈然としない事態に、思考に囚われていた。

「そうか……聖女ブリュンヒルトか！」

イラノフはこれほどのルブリンの市民を扇動できるのは、ハルガリア人たちではなく、聖女ブリュンヒルト以外にありえないことに気が付いた。だが、イラノフにはそれが分かったところで、どうしようもなかったのである。

「閣下！ 反撃の許可を！」

「バカを云うな！ 俺の民だぞ！ それを殺す訳にはいかん！」

配下の騎士の反撃を求める声を一蹴しながら、イラノフはルブレシアの市民の声をいくつか耳に拾っていた。

「偉大なる先王、ジグスムント陛下の意に逆らう反逆者め！」

「聖剣騎士団の犬！」

「平和を乱す悪魔！」

これらの声に、怒りを覚えながらも、イラノフは辛うじて平静を保つことに成功した。

「閣下！ 反撃しなければこのままでは弔り殺しに合います」

そうでなければ、続けて行われた反撃を求める声を拒否することなどできなかったであろう。この点、イラノフは騎士試合の時よりも巧みに精神のコントロールを行っていた。

「反撃したところでどうなる？ この暗い夜、建物の上や物陰から物を投げつけてくる市民にどう反撃しろというのだ。それにイーダ軍の兵士もまだまだ千五百人以上は残っているだろう。こんなところで立ち止まっているのが一番危険だ」

「ですが、さきほどから申し上げている通り、このままではこちらが総崩れに——」

いくら平静と云っても、これ以上、部下の無益な言葉を聞く気にはなれず、イラノフは遮るようにして号令した。

「外城壁まで下がる！ 南城壁と南門だけは絶対に確保せよ！」

「ここまで来て下がるのですか！」

「イーダ軍は既に白鷺城門を閉めてしまっただろう」

そうイラノフが云うと、今度は部下たちの間に勝利が遠ざかってしまったことへの不安が見て取れた。従って、イラノフはそれを取り除く必要に迫られた。

「大丈夫だ。リヴォニア軍が到着するまでまだ僅かだが時間がある。夜、建物の上からこうも物を落されたりしてはこちらの損害が増えるだけだ。こちらは反撃するにしてもそれさえも困難だ」

そう告げてから、イラノフは少しためらってから、強い声で、自分自身に言い聞かせるように断言した。

「明日の朝、もう一度総攻撃をかける。その時市民が邪魔するのであれば……殺すしかない」

※ 改稿しました。イラノフのブリュンヒルトか！の台詞は、ルブリン市民を扇動しえる存在が、ブリュンヒルトぐらいしかイーダ陣営にいないことに気付いたということです。

わかりにくくてもうしわけありませんでした。

第三章 内乱？（後書き）

お久しぶりです。ホーネットです。週一の更新は厳守するつもりはあります。そろそろ更新曜日をはっきり決めるべきな気がしてきました……次から月曜日更新でどうでしょうか？

第三章内乱は恐らく、全？話構成になるかなーと思っています。話し全体は5章構成とエピローグになるかと思います。その後はルブレシア戦記？か世界観に載っているチューリピア王国を舞台としたチューリピア戦記という形で世界を広げて行きたい所存であります。

そして、もう一つ、異能学園バトルものの連載をしようと思っています。こちらは水曜日更新にしようと思っています。暇な人は水曜日から始めるそちらのシリーズも見てくだされ。

第三章 内乱？

「なんとか守れたわね……」

白鷺城の東城壁の上から、撤退していくイラノフ軍と、それを見ながら歓声をあげ、モノを投げつける民衆とを見下ろしていた人物が、安堵の声を漏らした。その人物は、白い僧衣を纏った、若く、美しく、清廉そうな女性だった。彼女の名前はリイナといい、ブリュンヒルトの第一の部下であり、異端審問の際、レオとイーダをブリュンヒルトの元へと連れて行った人物であった。

「一時期はどうなるものかと思いました」

リイナの声に答えたのは、イーダの侍女であるエルネアであった。

「恐れるべきはレオ殿下の智謀か、ブリュンヒルト様の名声か」

このルブリン市民の決起は、幅広くイーダの私生活を管理するエルネアの持つ、中流階級への人脈と、ブリュンヒルトとの聖女としての圧倒的な名声と信頼を頼りにレオが策謀したものだった。

「イーダ殿下がお知りになれば、お怒りになることでしょうが……」

エルネアは、リイナの感嘆の対象よりであるレオやブリュンヒルトのことよりも、自分の主がこの作戦についてどう思うかについて、今更ながら不安に感じているようだった。イーダは市民を戦争に巻き込むことを嫌い、わざわざ防衛が困難な外城壁に兵を展開するくらいであったから、この作戦を知っていれば間違いなく反対していたに違いなかった。

だが、エルネアはレオの言葉を守り、イーダには無断でブリュンヒルトと打ち合わせをし、計画を立てたので、イーダはこの決起が自陣によって扇動されたものであることなど知る由はなかったのである

「エルネアさん、君主が敬われる人間である必要はあるけれど、部下の何人かが君主の代りに汚れ役をやらなければならないものなのよ」

清廉そうな印象を反転させるような台詞に、エルネアは、それはリイナ自身のことを指しているのかどうか気になった。エルネアは、この作戦がブリュンヒルトが細部まで熟慮して立てたものであるにも関わらず、ブリュンヒルト自身が実行者にならず、代わりにリイナがエルネアと共に工作を行ったことに考えが及んでいたのである。そして、純真な少女であるエルネアは、無防備にもそれについて尋ねようとした。

「あの……」

「何かしら？」

だが、エルネアは純真ゆえに、人の感情を読むことに長けていた。エルネアは、リイナの穏やかな表情が逆に、自分が今から聞こうとしている質問を拒否しているように思え、逃げるように別のことを尋ねた。

「いえ、ブリュンヒルト様やリイナさんはなぜこうまでしてイーダ殿下にお味方なさるのかと不思議に思ったのですが」

「そうね、私はブリュンヒルト様の命令を聞いているだけだから答えかねるけれど……」

リイナは優しい声色で答えたが、いまやエルネアにはその全てがうそ臭く感じ始めていた。

「ブリュンヒルト様の目的は唯一つ。キリシア大陸の平和を守ること。この戦いで、イーダ殿下に味方するのもそれに近づくから、かしらね」

だが、不思議と、エルネアはリイナのその言葉自体に嘘は感じなかった。だからこそ、自分の感じた違和感は勘違いではなかったのではないかと、一気に心の中にあったもやもやが霧散したように思えた。

「ブリュンヒルト様はいつもキリシア教徒のことを考えてくださっているのですね」

そんなエルネアが嬉しそうにリイナに云うと、リイナは小さく口を動かした。だがそれはエルネアに対して云ったものではなく、独白に過ぎなかった。

「……あの人は、その為なら何だってやってみせるけれどね」

リイナの独白を、エルネアは完全に聞き取ったわけではなかった。だが、リイナの独白が残した雰囲気は、エルネアの一度は霧散したものを再び呼び起こさせるのには純分であった。

「何かおっしゃいましたか？ リイナさん」

リィナの独白を微かに拾ったエルネアが尋ねても、リィナは穏やかで優しい表情を一切崩さないで、慈愛に満ちた声をエルネアに掛けるだけだった。

「いいえ、なんでもないわ、エルネアさん。今日はもうお休みなさいな。明日は朝からまたイラノフ軍が攻撃してくるでしょうから」

真に無垢な少女であるエルネアは、純白である……さらには純白でなくてはならない、聖女ブリュンヒルトの腹心であるリィナに対する暗い影を感じ始めていたが、ドス黒いものとは無縁の少女、エルネアにはそれを表現する言葉も感情も、勇気も欠けていた。結局、エルネアはリィナのその部分に関して、触れることをしないで、その指示に従って、眠りに就いたのであった。

第三章 内乱 ? (後書き)

今週は短めの更新で申し訳ないです。

来週は実は更新できるかどうか分かりません。前回予告していた新作は、スケジュールがきつかった為に公開を見合わせました。

とりあえず、来週はキリシア大陸物語さえ更新できるかわからないのに、そんな新作を公開する余裕なんてないだろう、と思ったわけです。(あたりまえ)

しかし、月曜日更新は今後もある限り守って行きたいと思い、努力いたします。あ、更新時間は17時が基本と云うことで。

第三章 内乱？

「レオはまだ来ないのか」

その疑問は、二、三日前から常にイラノフの胸のうちにあった。イラノフが把握していたのは、レオがリヴォニアを出立した日時と、ルブリンの北と東の30kmの地点に到達していないことだけだった。これはイラノフが配備したりヴォニアから通じる北と東の街道の、斥候網に、レオたちが捕捉されないことから明らかであった。

イラノフの予測では遅くとも今朝にはレオの率いる軍勢を斥候網が捉え、翌日には対峙を迫られるはずであった。

「まあ、来ないのならばそれに越した事はない」

イラノフの方も、続々と諸侯の兵と傭兵を募っており増強を見込むことができるが、戦闘に長けたリヴォニア軍四千に匹敵する戦力として当てにできるかどうかは微妙なところであった。

「正午から総攻撃を開始する！ それまでに食事を済ませ、引き続き休養せよ」

☆ ☆ ☆

イラノフ軍が、再度の総攻撃の準備をしている間、イーダはある布告をルブリン市民へと出した。

「市民に対して、イラノフ軍を攻撃しないように命じて下さい」

このイーダの言葉を聞いた、あるハルガリアの士官は、次のように進言した。

「殿下、せっかくルブリン市民は我らの味方をしてくれているので、義勇兵を募っては如何でしょうか？」

しかし、この提案はイーダの

「民衆をこれ以上戦争に巻き込むつもりはありません。」

という一言で却下されてしまった。このハルガリア人の士官は、イーダの決定に不満そうな顔をしたが、ハルガリア人であるイーダがルブリン市民に支持されているのは、このような人柄があつてこそであつた。

「攻撃開始！」

イラノフの自信に満ちた号令が、戦鼓隊に伝わり、空気を震わせる音を響かせる。それに続く、鎧を纏ったルブレシアの歩兵隊の軍歌の音が大地を奮わせる音を響かせる。

イラノフの声に乗った自信は、ルブリンを今日中に落とせるという確信を抱いていたからである。イラノフ軍の戦力は未だに九千以上を数える一方で、イーダ軍のそれは、千五百を切っていた。

既に抑えてある南門と西門から、イラノフ軍は堂々とルブリン市内に突入した。イラノフ軍の将兵は昨夜のルブリン市民の憎悪に対して警戒を示していたが、既にイーダの宣告が広まっていた為に、ほとんど市民たちからの妨害はなく、すぐさま内城壁の攻囲にとり

かかった。

「風向きは？」

イラノフは自身が呼び出した後方管理の士官に問いかけた。

「はっ！ 北向きでございます」

その返答を聞いたイラノフは、その整った切れ目の視界の端に、自身の髪がなびく方向が北であることを確認した。

「よし、ここに来るまでに農民からかき集めたアレは？」

「用意しています」

イラノフの確認に、士官は間髪を入れずに答えた。

「よし、では、予定通りの位置で燃やせ」

「かしまりました」

イラノフの指示を受けた士官は、一礼してイラノフの元を去って、その指示を実行に移した。

☆ ☆ ☆

「うん？ なんだ？ 攻城塔の類か？」

城壁から矢を放つイーダ軍の兵士が、何やら二メートル程の台を全面に押し出してきているのを見つけた。

「馬鹿な。城壁は五メートルはあるのだぞ？　無意味だ」

全く持って、その通りであり、イラノフ軍が持ってきた台は、攻城塔としての役割を果たすには低すぎた。それだけではなく、あまりに防御力に欠ける、骨組みのみの物体で、兵士を矢から守る壁さえなかった。

その台にイラノフ軍の兵士が何かを載せ、火を点ける光景を見ても、イーダ軍の兵士には、これからイラノフ軍が何をするつもりなのか、察することができなかった。

「おい、奴ら、何か燃やしているぞ？」

「城に火を放つつもりか？」

「馬鹿な。城壁は石だぞ？　城内に火矢を放つならともかく、城外から燃えるものか」

「おい、なんだ！　煙が！」

イラノフ軍が燃やしたモノは、進軍の途中で農家から買い取った藁と家畜の糞であった。狼煙にも用いられるそれを大量に燃やしたのだ。

「視界が！」

立ち上る煙が、緩やかに、だが確実に風によって城壁の方へと立ちこめていき、イーダ軍の兵士たちの視界を塞いだ。

「ぐほっぐほっ」

「おい！ 敵がくるぞ！ 矢を討て！」

「だが、この視界の悪さで闇雲に撃ったところで当たるとは思えんぞ！」

このイーダ軍の兵士の考えは正しかった。元々、市中の中央にある内城壁の周囲には建造物も多く、イラノフ軍は密集することができないのだ。密集していない敵に、煙の中闇雲に矢を射ったところで当たるはずもなかった。

「しかし、これでは相手もこちらに近寄れないのではないか？」

イーダ軍の兵士の一人が、そう意見を述べたが、その短慮は彼の首と胴体とを永遠に分離させるという結末を産んだ。城壁を登りきった、イラノフ軍の兵士の一人が、剣を持って一刀の元に切り伏せたのである。

「わざわざ台人の頭よりも高い台で煙を焚いたのだ。煙は基本的に上に行くものだ」

イラノフが不敵に微笑みながらそう独り云った。元々、どこか陰を感じさせるタイプの美青年であるイラノフのそのような表情は、ある一枚の絵にするに相応しいものであり、それを見た近臣たちを鼓舞した。

「さあ、城壁にとりつけ！ 登り切った先にいるのは敵だ！ ただ切り伏せば良い！」

イラノフのある士官はどのように命令した。それは乱暴だが、的確な命令でもあった。

「糞！ 敵はどこだ！」

煙幕のなか、そう叫んだ兵士は、客観的に見て、愚かな人物であった。彼は自らをイーダ軍の兵士であることを告白した上に、居場所までもを教えてしまったのである。

「ぐあ！」

しばしば戦場ではある個人が武勇に優れているだとか、劣っているだとか、あるいは愚者であるだとか賢者であるだとかではなく、完全なる運命によって生死を決定されてしまうことがあるが、この場合はその法則の例外にあたった。愚かなイーダ軍の兵士の一人である彼は、煙の中でイラノフ軍の兵士が声を元に当たりを付け、手探りに放った一閃によって肩から胸にかけてを切り裂かれてしまったのである。

「城壁の一部で、敵の射撃が沈黙しました。どうやら城壁の一部を味方が占拠したようです」

イラノフはそう報告を受けると、直ちに次の指令を下した。

「消火！ 続いて予備兵力を射撃が止んだ部分へ投入せよ！」

南城壁は、もはやイラノフ軍に制圧されつつあった。

☆ ☆ ☆

「南城壁が敵に制圧されつつあります！ 南門開門も時間の問題になりつつあります！」

その報告は、イーダの整った美貌を僅かにたじろかせたが、声にその事への動揺を口に出すことを辛うじて避けることができた。

「……………」

「殿下」

ハルガリア人の近衛士官の一人が、イーダの前に進み出た。

「敵の主力の反対側——手薄な北門から脱出なさいませ。今ならば、三百人以上の、秩序ある編隊によって攻囲の一角を崩せるかもしれません。しかし、事態がさらに混乱すればそれさえも困難になるかと」

逃げる、という選択肢は、イーダの勇敢であるという気性にも、味方を見捨てるたくないという優しい性格にも反するものであった。

しかし、イーダには、優れた感性与理性の均衡があり、自身がすべき道が逃亡にあることを認めた。

「ここまでかしらね……」

☆ ☆ ☆

「勝ったな。イーダが逃亡するかもしれぬから、他の城壁を攻撃している軍勢に注意を喚起しておけ」

イラノフがそう命じてから、伝令が出るまでの僅かな間に、イラノフの勝利を覆しかねない報告が、イラノフ軍の本営に飛び込んだ。

「急進！ 急進！」

「何事だ」

急進、という言葉聞いても、イラノフの精神は既に目前にした勝利によって高揚しており、まったく緊張感のない視線を、自身の前に膝まづいた兵士に向けた。

「リヴォニア軍が襲来しました！」

その言葉を聞いて、ますますイラノフは一笑に付した。

「襲来？ 襲来がどうしたというのだ。いまやルブリンは○た状態だぞ？ 今更、ルブリンから三〇kmのところに来たところでどうということはない」

云いながら、イラノフは暗い色合いの金髪を手でかきあげた。彼自身は気が付いていないが、これは彼が内心で相手を愚かだと思つたときに出る癖であった。この場合、もはやレオが斥候網に引つかかる場所まで進軍したところで、“急進”である事態ではないというところが理解できていない部下に向けられた仕草であった。だが、髪をかきあげるために伸ばされたその手は、兵士のさらなる言葉によって思わず静止させられた。

「違います！ リヴォニア軍はルブリンの直そば……およそ二kmの地点に展開しています」

「馬鹿な！ それではなぜもっと早く斥候網に引っかからなかったのだ！」

イラノフが怒鳴りつけると、兵士は一瞬、恐縮したようにビクいた後に報告を続けた。

「そ、それがリヴォニア軍は北や東からではなく、南から現れました！」

「何？」

イラノフは、すぐさま頭にルブレシア全体の地図を描いた。そして、三十秒ほどの沈黙の後に一つの結論を見出した。

「まさか、大きく迂回して我々の背後に回りこんだのか？」

イラノフのこの声を聞いた、イラノフ派の貴族が、思わず驚嘆の声を漏らした。

「もしそうだとすればなんという神速か」

リヴォニア国境からルブリンまではおよそ直線で二百kmであり、強行軍で進軍しても十日はかかる。もし軽騎兵のみの編隊であれば、五、六日で到達できなくもないが、斥候網にかからぬように迂回すれば、その行軍距離は六百kmにも及ぶことになる。通常の行軍の速度ならば、十五日はかかるであろうがレオは僅か十日で、即ち一日に六十km近い進軍を行ったことになる。これは、驚愕に値する偉業であった。戦は速さというレオの軍略を体現した進軍であったといえる。

☆ ☆ ☆

「あの煙はなんだ！」

その恐怖が混じった声の主は、意外なことにレオであった。

レオが、ルブリンの南に姿を現したとき、ルブリンからは煙が立ち昇っていた。これは、イラノフの例の作戦によって発生していたものだが、レオたちにはルブリンが陥落しているようにも見えるのである。

「まさか、僅かに遅かったのか」

「殿下！ そのような短慮はあなたらしくない」

早計に結論を導いたレオを、ユルギスがたしなめると、レオは落ち着こうと掌を額にあて、一呼吸してから、ユルギスの正しさを認めた。

「そうだったな」

そして、もう一度、肺に空気を吸い込み、吐き出すときには、再びいつもの覇気に満ちたレオの声が発せられた。

「だが、事態が急を要するのは恐らく間違いないだろう。全軍、今まで以上の速度を持ってルブリンへ突入せよ！」

リヴォニアの誉れ高い軽騎兵四千が、馬蹄を轟かせてルブリンへと駆けだした。

☆ ☆ ☆

「どうしますか、閣下！」

「閣下！」

部下たちの焦りの声の中で、イラノフは、どのようにすればリヴォニア軍を迎撃できるかについて思考し、一つの対策を思い立った。

「城壁だ！ すべての外城壁の門を閉ざせ！ リヴォニア軍は進軍速度から間違はなく軽騎兵のみの編隊だ！ 城壁さえ閉じてしまえば何もできぬ！」

「はっ、ただちに！」

答える兵士の背を見送る暇もなく、イラノフはさらに命じた。

「後方の兵を外城壁を守らせろ！ 他の城壁の軍勢にも外城壁を閉じるように命令を下せ！」

イラノフの命令は、迅速に実行に移されつつあった。複数の兵士が、城門を閉じようとからくりの輪を回していた。

「急げ！ 門を閉じるぞ！」

彼らの中でもっとも上位と思われる兵士が、そう告げると、兵士たちは力を合わせ、輪を回し始めた。

「よし、タイミングを合わせるぞ！ 一、二、さ……」

彼の声は、そこで途切れることになった。背後から喉を切り裂かれた彼がこれ以上声を発することは、地上の摂理に反しているから、当然のことであった。

そして、その兵士の背後から、七人ほどの黒装束の人間が姿を現した。

「何者だ！」

イラノフ軍の兵士がからくりを動かす手を止めて剣を抜くが、黒装束の人間たちの動きは達人級であった。

「ふっ！」

「ぐああ」

一人が、両腕を切断され、無力化され、

「かっ」

また、一人が胸を貫かれその命を散らせる。

「な、なんだお前たちは！」

イラノフ軍の兵士の一人が剣で腹部を貫かれたまま黒装束のフー
ドを引き下ろした。

「教会がイーダ王女を支持していることを知っていながら、教会に
対して何も警戒を示さなかったのは失敗でしたね」

そこにあつた顔に、兵士は見覚えがあつた。それは、聖女ブリュンヒルト付きの金色の髪をした聖職者、リイナであつた。

「まさか、キリシア教会の――」

兵士がそこまで云つたところで、リイナは腹部に刺している剣を捻つた。内臓からの出血が増加し、それは喉をのぼり、兵士の声と生命を消し去つた。

「おい、あいつら何者だ!」

その場にいたイラノフ軍を全て殺害したリイナたちの姿を、イラノフ軍の兵士たちが捉えた。

「どうなさいますか?」

黒装束の一人が、リイナに問うと、リイナはフードを被りながら、城門の外へと視線を移した。数百メートル先に、リヴォニア四千騎が迫っていることを確認すると、この場にこれ以上留まる理由はないと判断した。

「ぎりぎりでレオ殿下は間に合うでしょう。わたし達が目立つ訳にもいかないし、ここはさっさと戻ることにしましょう」

云つて、リイナたちはその場から去っていった。イラノフ軍の兵士たちの関心は彼女たちよりも、城門に向けられていたので、彼女たちの存在が公になることはなかった。

第三章 内乱？（後書き）

更新が遅れて申し訳なかったです。

ほんともうリアルが忙しくてですね……。

しかも内乱編、あと1、2回は続きそうだし……こんなに長くするつもりなかったのになー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8374w/>

キリシア大陸物語 ～ルブレシア戦記～

2011年12月20日17時53分発行